

福岡市埋蔵文化財調査報告書第483集

西新町遺跡4

—西新町遺跡 6・7次調査報告書—

1996

福岡市教育委員会

西新町遺跡4



遺跡略号 N S J - 6 · 7
調査番号 9 3 6 4 · 9 4 1 1

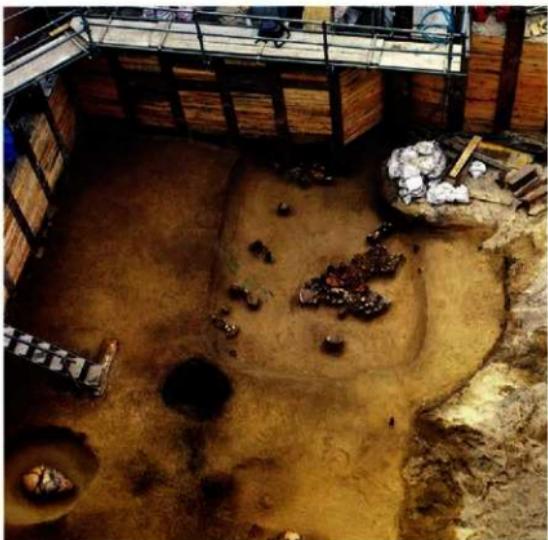
1996年3月
福岡市教育委員会

巻頭図版 1



西新町遺跡 6 次調査出土の石錐

巻頭図版 2



西新町遺跡 7 次調査区検出遺構（東より）

序 文

福岡市西部に位置する早良平野は古来より先達の生活の場であったようで、緊急発掘によって明らかになった遺跡も年ごとに数を増してきています。

西新町遺跡は、これまでの調査によって弥生から古墳時代にかけての遺跡として知られてきました。ここに報告するのは民間のビル建設に伴って実施された埋蔵文化財の調査結果です。今回確認された遺構は弥生時代の墓域や集落の広がりをしめすもので、貴重な資料を得ることができました。なかでも住居跡や土坑から出土した鉄斧や石錘は、当時の交易や生業を知るうえで注目されます。

将来この報告書が内外の文化交流に役立つことを期待します。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたりご協力いただいた関係者のみなさまに心より御礼を申し上げます。

1996年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 開

例 言

- 本書は、集合住宅の建設に伴って発掘調査した福岡市早良区西新に所在する西新町遺跡第6・7次調査の報告書である。
- 調査は、福岡市教育委員会を主体とし、1993年・1994年度に発掘調査、1995年度に整理作業を行った。
- 本書に使用する方位はすべて磁北である。
- 遺構の実測は、調査参加者で分担して行った。
- 写真撮影は、調査担当者のほか鉄斧の処理前の写真を本田光子がおこなった。
- 遺物の実測は、調査担当者がおこなった。
- 本書に使用した地図のうちFig.1は都市計画図、Fig.2は道路管理台帳をもとに作成した。
- 出土遺物とデータ類は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管の予定である。
- 本書の編集・執筆は、常松が行った。

遺跡調査番号	9364	遺跡略号	NSJ-6
分布地図番号	72-A-1		
調査地地籍	福岡市早良区西新5丁目634-4外		
開 発 面 積	1,041m ²	調査面積	667m ²
調 査 期 間	1994年3月1日～94年6月15日		

遺跡調査番号	9411	遺跡略号	NSJ-7
分布地図番号	72-A-1		
調査地地籍	福岡市早良区西新5丁目53・54		
開 発 面 積	368.96m ²	調査面積	300m ²
調 査 期 間	1994年4月16日～94年5月22日		

本文目次

第1章	調査の概要	1
第2章	西新町遺跡6次調査	4
第3章	西新町遺跡7次調査	18
第4章	まとめ	

Summary

挿図目次

F i g . 1	西新町・藤崎遺跡調査区位置図 (1/10,000)	折込み
F i g . 2	西新町遺跡6・7次調査区位置図 (1/750)	3
F i g . 3	西新町遺跡6次調査区遺構配置図 (1/120)	4
F i g . 4	西新町遺跡6次調査区土層図・上層検出遺構配置図 (1/120)	5
F i g . 5	6次調査区 SC-01, SC-02 遺構実測図 (1/60)	7
F i g . 6	6次調査区 SC-03, SC-04 遺構実測図 (1/60)	8
F i g . 7	6次調査区 SC-06 遺構実測図 (1/20・1/60)	9
F i g . 8	6次調査区 SC-05, SC-07 遺構実測図 (1/60)	10
F i g . 9	6次調査区 SC-08, SX-09, SC-10 遺構実測図 (1/60)	11
F i g . 10	6次調査区 SC-01, SC-03, SC-04 出土遺物実測図 (1/4)	12
F i g . 11	6次調査区 SC-05, SC-06 出土遺物実測図 (1/4)	13
F i g . 12	6次調査区 SC-07, SC-08 出土遺物実測図 (1/4)	14
F i g . 13	6次調査区 包含層・検出面出土遺物実測図 (1/4)	15
F i g . 14	6次調査区出土漁撈闘込遺物実測図 (1/3, 2/3)	16
F i g . 15	西新町遺跡7次調査区遺構配置図 (1/150)	18
F i g . 16	7次調査区1~4号壇棺墓実測図 (1/20)	19
F i g . 17	7次調査区5号壇棺墓実測図 (1/20)	20
F i g . 18	7次調査区 SC-01, SC-03 遺構実測図 (1/60)	21
F i g . 19	7次調査区 SK-02, SK-05, SX-06, SX-07 遺構実測図 (1/40)	22
F i g . 20	7次調査区1~4号壇棺墓実測図 (1/6)	23
F i g . 21	7次調査区5号壇棺墓実測図 (1/6)	24
F i g . 22	7次調査区出土遺物実測図 (2/3)	24
F i g . 23	7次調査区 SC-01 出土遺物実測図 (1/4)	25
F i g . 24	7次調査区 SC-03 出土遺物実測図 1 (1/4)	26
F i g . 25	7次調査区 SC-03 出土遺物実測図 2 (1/4)	27
F i g . 26	7次調査区 SC-03 出土遺物実測図 3 (1/4)	28
F i g . 27	7次調査区 SK-02, SX-04 検出面出土遺物実測図 (1/4)	29
T a b . 1	6次調査区出土遺物観察表	17
T a b . 2	7次調査区出土遺物観察表 1	30
T a b . 3	7次調査区出土遺物観察表 2	31
T a b . 4	出土土器の様相	32

第1章 調査の概要

調査の経緯

6次調査実施までの経緯は以下のとおりである。平成6年1月、野村不動産株式会社から教育委員会埋蔵文化財課に福岡市早良区西新5丁目643-4外における埋蔵文化財の有無について照会された。埋蔵文化財課では、該地が西新町遺跡群に含まれていることから、同1月19日試掘調査を実施した。試掘によって遺構の存在が確認されたため調査を行なう方向で協議がもたれた。協議の結果、調査は建築の工程上、93年度と94年度にかけて実施することになり3月から6月中旬にかけて調査を実施することで合意し、委託契約が結ばれた。表土持出しと調査事務所などの条件整備が整った後、発掘調査を開始し、契約期間内で調査を実施した。

つぎに7次調査実施までの経緯を以下に記す。平成6年3月、三井建設九州支店から教育委員会埋蔵文化財課に福岡市早良区西新5丁目638-9における埋蔵文化財の有無について照会された。埋蔵文化財課では、該地が西新町遺跡群に含まれていることから、同3月15日試掘調査を実施した。試掘によって遺構の存在が確認されたため調査を行なう方向で協議がもたれた。協議の結果、調査は建築の工程上、94年度当初に実施することになり、建築物の基礎工事を先行したのちに調査を実施することで合意し、委託契約が結ばれた。表土持出しと調査事務所などの条件整備が整った4月下旬、発掘調査を開始し、契約期間内で調査を実施した。

調査にあたっては委託者ならびに関係各位の高配を賜った。厚くお礼申し上げる次第である。

調査委託 野村不動産株式会社（6次調査）

三井建設九州支店（7次調査）

調査主体 福岡市教育委員会 埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 学（当時）荒巻輝勝

埋蔵文化財第一係長 横山邦繼

事前審査 主任文化財主事 山口諒治（当時）

菅波正人（試掘）

庶務 吉田麻由美（当時）西田結香

調査担当 埋蔵文化財第一係 常松幹雄

調査・整理参加者 池田由美・伊藤ミドリ・井上ムツ子・牛尾秋子・牛尾二三子

衛藤美奈子・菊地栄子・古賀誠二・佐藤志津・末永 諭

惣慶トミ子・竹下裕子・鳥井原良治・原 美晴・平野義雄

藤野真紀・船越恒人・堀本歳四郎・松元恵美・柳浦八重子

山西人美・吉川順岳・脇坂レイコ

遺跡の形成と発見のあゆみ

西新町遺跡と藤崎遺跡は、博多湾に面して隣接する砂丘遺跡である。地質学的研究によると、砂丘の形成段階は、およそ3段階に要約できるといふ。

- 第一段階 今から三千五百年ほど前の繩文海進の最盛期には、藤崎遺跡の西側から海が入り込み、波による侵食をうけながら、一部では砂を堆積させた。
- 第二段階 砂灘が形成されるようになると、一段と陸地化が進んだ。
- 第三段階 その後、風成砂（風で運ばれてきた砂）が堆積するようになり、二千五百年ほど前には砂丘になる。風成砂の堆積は7世紀頃まで続いた。

また両遺跡における考古学的所見は、弥生時代の墓制や土器研究で重要な位置を占めている。主だった発掘・発見を以下にあげよう。

1912年（明治45年）、土砂を採集中箱式石棺を発見。棺内から成人骨と三角縁二神龍虎鏡一面、素環頭大刀一口が発見された。棺内には赤色顔料が確認されたとある。

鳥田寅次郎によりとして報告され、藤崎古墳などと呼ばれた。「藤崎の石棺」「史蹟名勝天然記念物調査報告書第一編」福岡県、1925年

1917年（大正6年）、箱式石棺から方格渦文鏡出土。

中山平次郎により、資料紹介と遺跡の概要を記した。藤崎石棺群と呼ばれた。「古式支那鏡鑑沿革（二）」「考古学雑誌第9巻第3号」考古学会、1918年

1930年（昭和5年）、大正6年と同じ場所で、弥生時代前期の壇棺墓と副葬小塗、箱式石棺墓が出土。永倉松男・鏡山猛が調査し、遺跡の状況と壇棺の副葬小塗の実測図を示した。「筑前藤崎に於ける弥生式遺跡」「考古学第2巻第1号」東京考古学会、1931年

1930年（昭和5年）、修猷館の運動場の東南端に近い明治通り沿いで電柱の立替え中に丹塗で蓋付きの壇棺が出土した。現在この壇棺は、東京国立博物館の蔵品となっている。永倉松男・鏡山猛「筑前福岡市発見の壇棺」「考古学第1巻第5・6号」東京考古学会、1930年

昭和30年代、旧藤崎刑務所内で工事中に弥生中期の壇棺墓が発見された。弥生終末期の標式とされる土器もこの辺りで出土した。森貞次郎は北部九州の弥生土器の編年について「弥生の下限を西新期より下げることはできない」と述べた。「九州」「日本の考古学III」河出書房新社、1966年

1976～78年（昭和51～53年）、市営地下鉄の工事にともなって福岡市教育委員会が発掘調査。修猷館高校前の約500mの区間で、壇棺墓30基と弥生終末から古墳時代にかけての集落を調査。西新式土器の実態解明がすむ。福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集、1982年

1977～78年（昭和52～53年）、市営地下鉄の工事にともなって福岡市教育委員会が発掘調査。藤崎交差点付近を中心壇棺墓91基、石棺墓4基、土壙墓23基を調査し、弥生時代の集団墓地の様子が明らかとなった。福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集、1981年

1977年（昭和52年）、民間ビルの建設にともなう調査で、弥生前期の壇棺から碧玉製の管玉が出土した。

1980年（昭和55年）、藤崎バスターミナルの建設にともなう調査で、方形周溝墓の主体部から三角縁二神車馬鏡が出土した。福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集、1982年

1984年（昭和59年）、修猷館高校図書館改築にともなって福岡県教育委員会が発掘調査を行なう。古墳時代前期の住居跡から朝鮮半島南部から運ばれた土器がまとまって出土した。福岡県文化財調査報告書第72集、1985年

1995年までに教育委員会によって、西新町遺跡は10次、藤崎遺跡は26次にわたる発掘調査が行なわれてきた。西新町遺跡8次調査で検出された住居跡は、弥生時代中期にさかのぼる集落の存在を明らかにした。西新町遺跡10次調査では、頭骸骨のない人骨あるいは頭骸骨だけを収めた壇棺墓が発掘されており、「儀礼」・「戦闘」両面で検討されている。

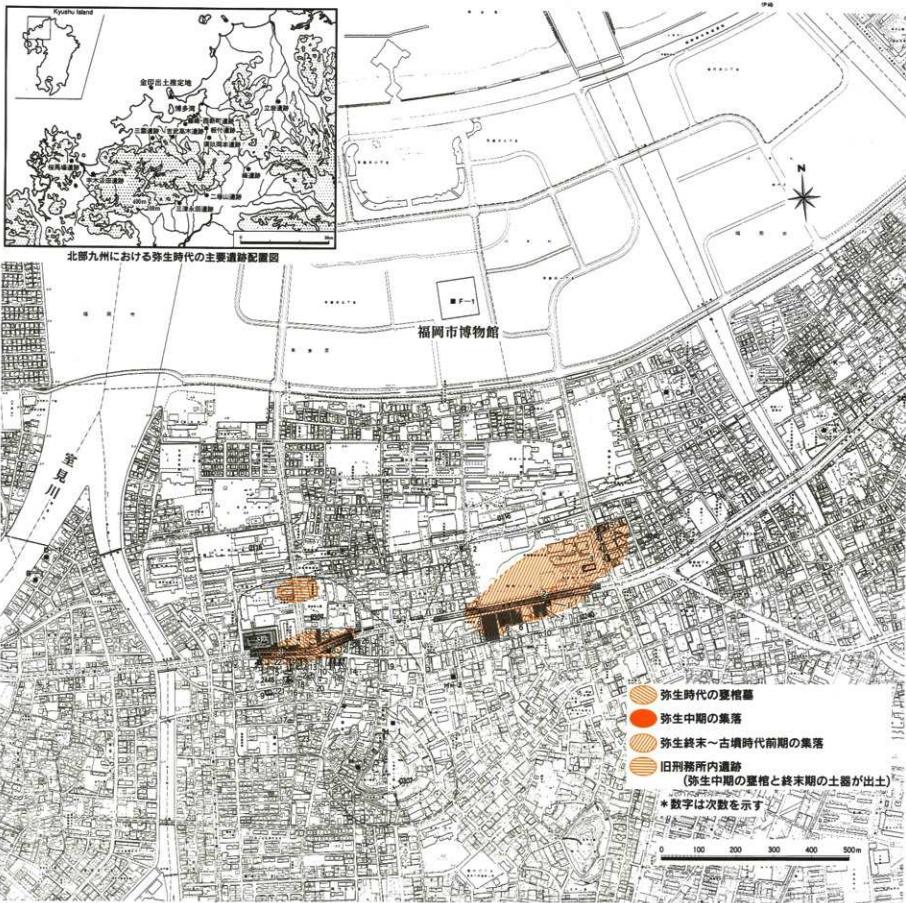


Fig.1 西新町・藤崎遺跡調査区位置図 (1/10,000)

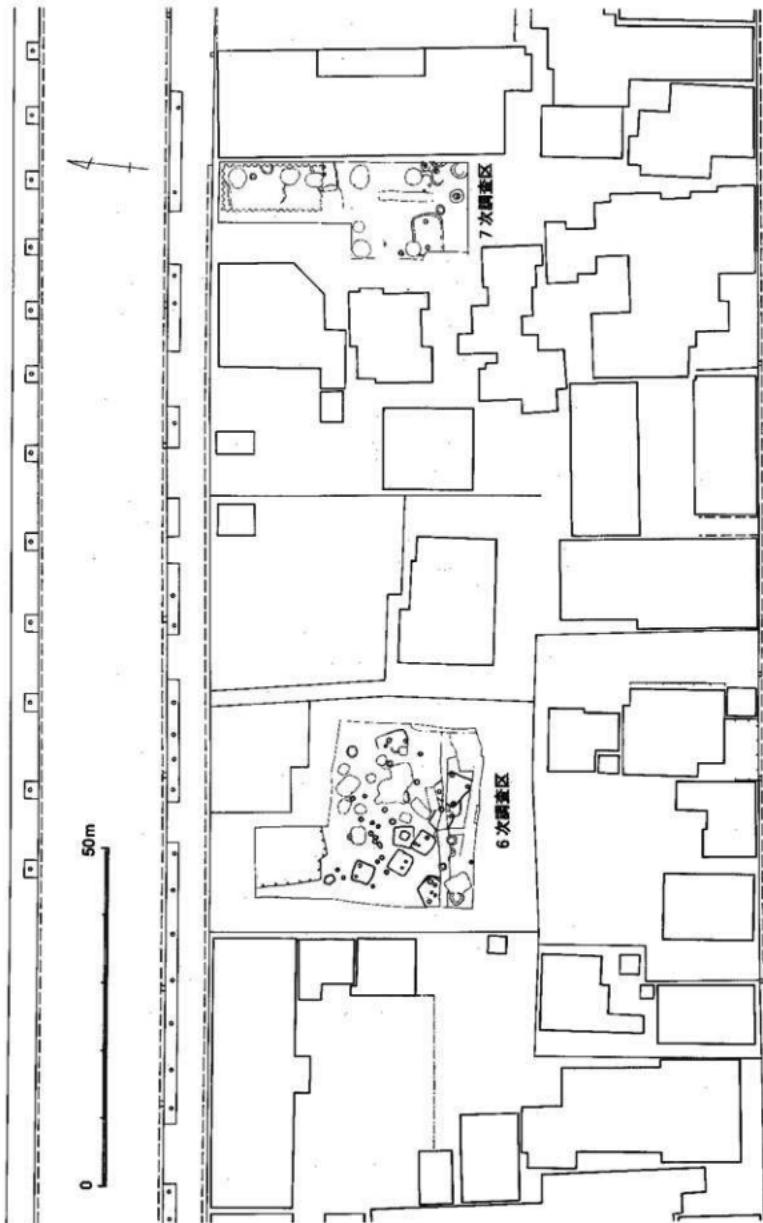


Fig. 2 西新町道路の6・7次調査区位置図 (縮尺1/750)

第2章 西新町遺跡6次調査

6次調査区は、海岸線に沿って東西に延びる砂丘の南斜面に位置する。遺構検出面の標高は、4m前後である。侵入路付近は、構造物によって搅乱を受けていた。東壁と西壁の土層図からも明らかなように、風成砂からなる遺構面は、緩やかに南側に傾斜しているのがわかる。

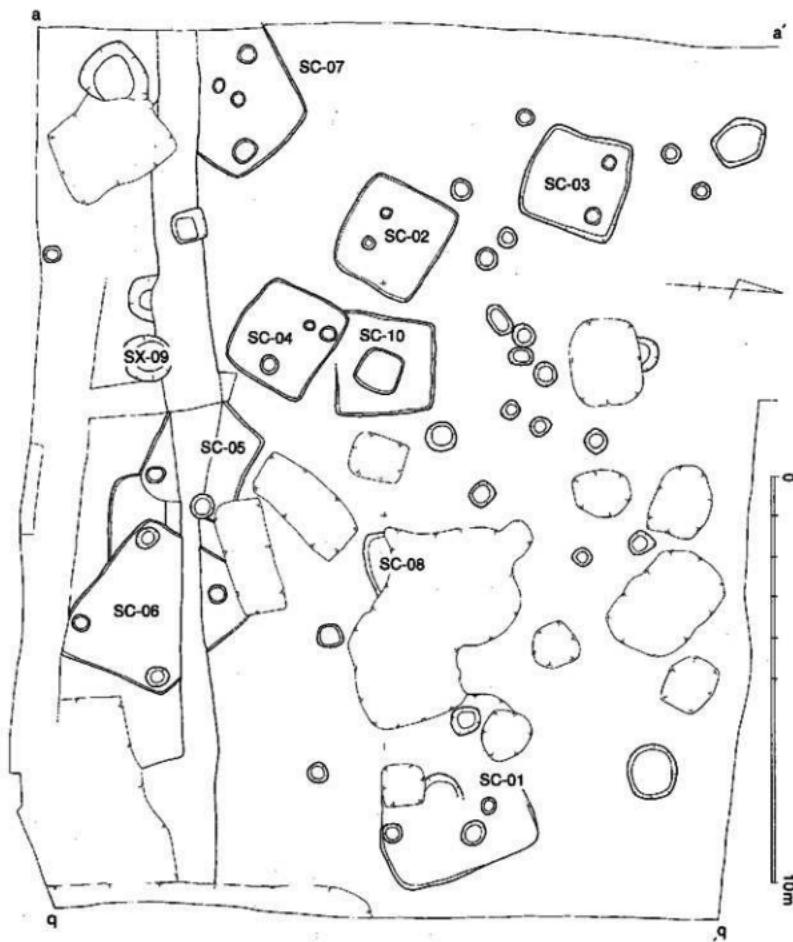


Fig. 3 西新町遺跡の6次調査区遺構配図 (縮尺1/120)

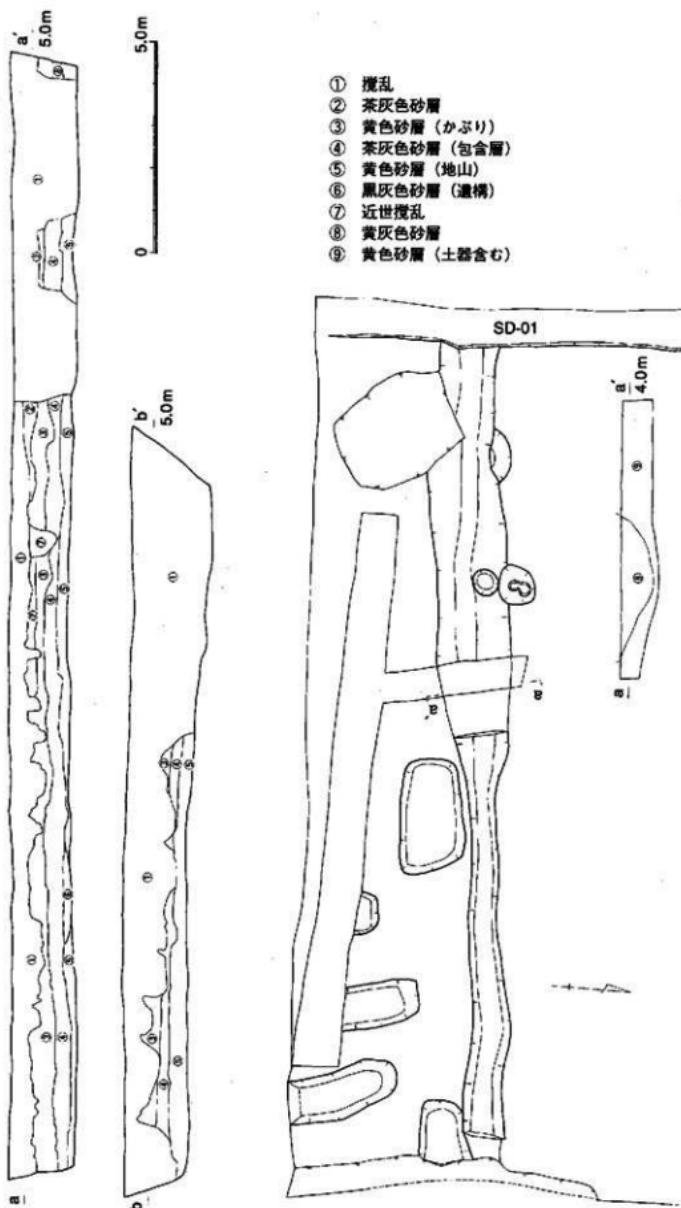


Fig. 4 西新町遺跡 6次調査区土層図・上層検出遺構配置図（縮尺1/120）

遺構の分布 遺構検出を開始した当初、遺構プランは明瞭でなく、ようやく確認できたのは、東西方向にはしる 1 条の溝のみであった。溝は、N - 95° - W の方位をとる。この溝は幅を 1.93 ~ 0.66 m と変えながら、西接する 8 次調査区においても確認されている。しかし時期が比定できるような遺物は検出されていない。

S C - 01 調査区東側で検出された。西側は擾乱を受けているが、隅丸方形プランの住居跡であろう。a · a' で 4 m あまりである。床面と壁面の上部との比高差は、約 15 cm 程度しかなく、かなり削平されている。柱穴は、3 か所で確認できたが、b · b' の柱間が主柱穴となるかも知れない。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

S C - 02 調査区西側で検出された隅丸方形プランの住居跡である。長軸は a · a' で 2.8 m、短軸は b · b' で 2.6 m をはかる。床面と壁面の上部との比高差は、約 25 cm 程度である。柱穴は、長軸上に 2 か所確認できたが、柱間は 1 m に満たない。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

S C - 03 調査区西側で検出された隅丸方形プランの住居跡である。一辺は 2.7 ~ 2.8 m をはかる。床面と壁面の上部との比高差は、20 ~ 30 cm 程度である。柱穴は、北側寄りで 2 か所確認できたが、柱間は 1.5 m ほどである。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

S C - 04 調査区西側で検出された隅丸長方形プランの住居跡である。S C - 10 を切っている。a · a' で 4.0 m あまりである。床面と壁面の上部との比高差は、約 30 ~ 40 cm ほどある。柱穴は、3 か所で確認できたが、主柱穴は不明である。遺物は、床面から浮いた状態で出土した。

S C - 05 調査区中央部で検出された長方形プランの住居跡である。長軸は 2.9 m、短軸は 2.6 m である。南東隅で長胴甕と鉢が横たわった状態で検出された。また北東隅の柱穴の上部で大型の石錘が出土した。柱穴は、遺物の出土状況を記録したのちに東寄りの短軸上で 2 か所確認できた。柱間は 1.5 m をはかる。柱穴の検出面と壁面の上部との比高差は、約 60 cm をはかる。遺構図では遺物の下面で確認された淡灰色の砂層をスクリーントーンで示した。

S C - 06 調査区南側中央で検出された。西南部は擾乱を受けて、規格は不明だが、短軸 2.9 m 程度の隅丸長方形プランの住居跡であろう。高杯が伏せられた状態で出土し、中央部の支脚が集中する部分の直下で不整円形に堆積した焼土層を確認した。床面と壁面の上部との比高差は、20 ~ 30 cm 程度である。柱穴は、焼上下で 2 か所と住居の東西で 2 か所確認できたが、主柱穴は、不明である。

S C - 07 調査区南西側で検出された長軸 4.0 m、短軸 3.5 m の隅丸長方形プランの住居跡である。南隅の柱穴の上部付近では、台付甕や長胴甕がまとまって出土し、土器の下に団のような位置で焼石が検出された。焼石付近の埋土には炭化物が多く見られたが、明瞭な焼土層の堆積や粘土などは確認できなかった。床面と壁面の上部との比高差は、10 cm 程度である。柱穴は、それぞれの隅で計 4 か所確認できた。

S C - 08 調査区中央部で、高杯の受け部に鉢が入った状態で出土したことから住居の存在が明らかとなった。大部分擾乱を受けているため遺っているのは南西隅の一部のみである。

S X - 09 調査区の南西部で検出された不整円形の土坑である。溝に切られていた。覆土に炭化物を多く含んでいた。出土遺物は扁平な甕のみである。

S C - 10 調査区南西側で検出された一辺 2.6 m の隅丸方形プランの住居跡である。南西隅を S C - 04 に切られていた。床面と壁面の上部との比高差は、15 cm 程度である。中央部に不整方形の落ちを確認できたが、柱穴は確認できなかった。出土遺物はみられなかった。

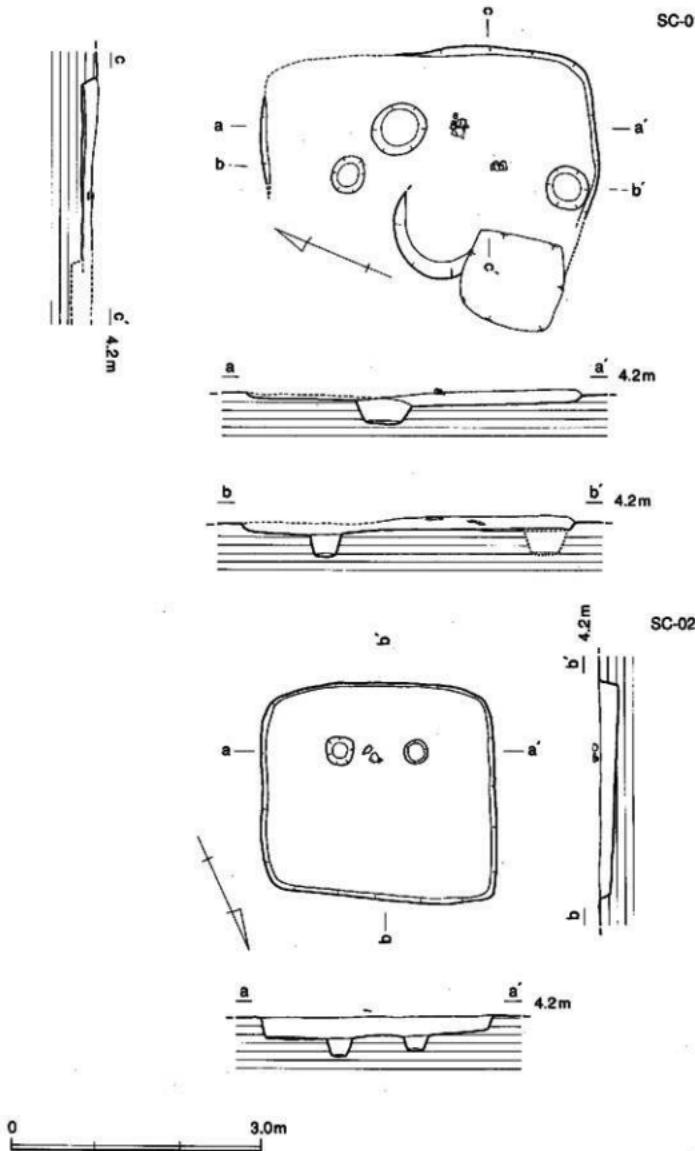
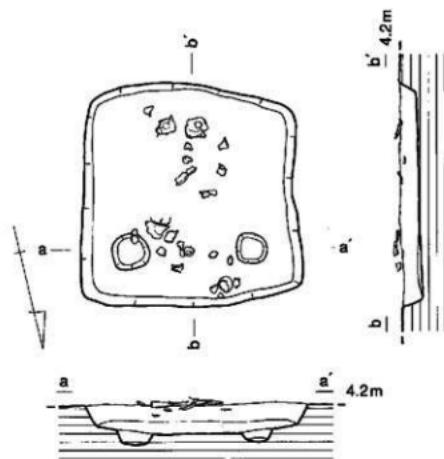


Fig. 5 6次調査区SC-01, SC-02遺構実測図 (縮尺1/60)

SC-03



SC-04

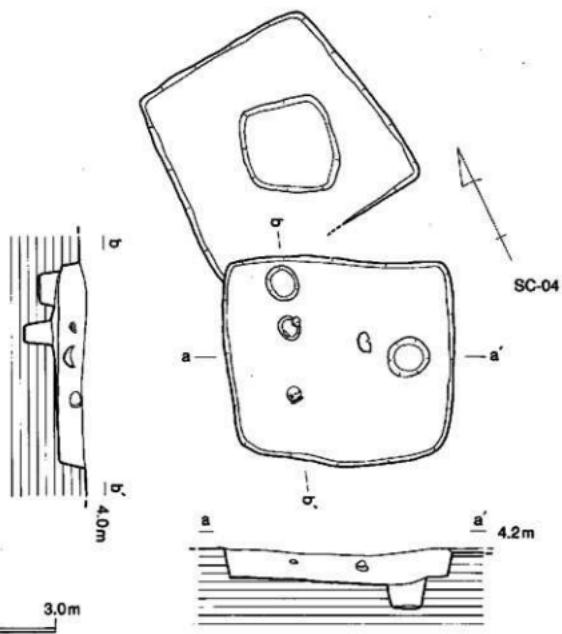


Fig. 6 6次調査区SC-03, SC-04遺構実測図 (縮尺1/60)

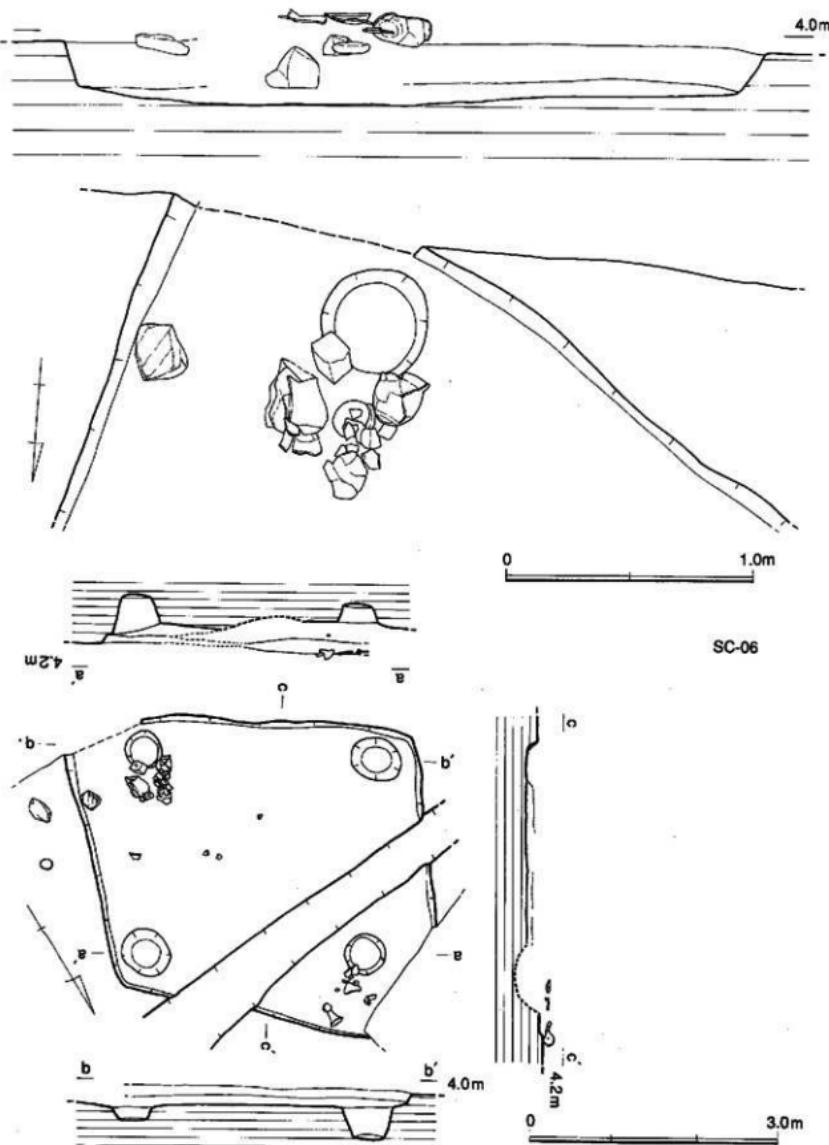


Fig. 7 6次調査区SC-06遺構実測図（縮尺1/20・1/60）

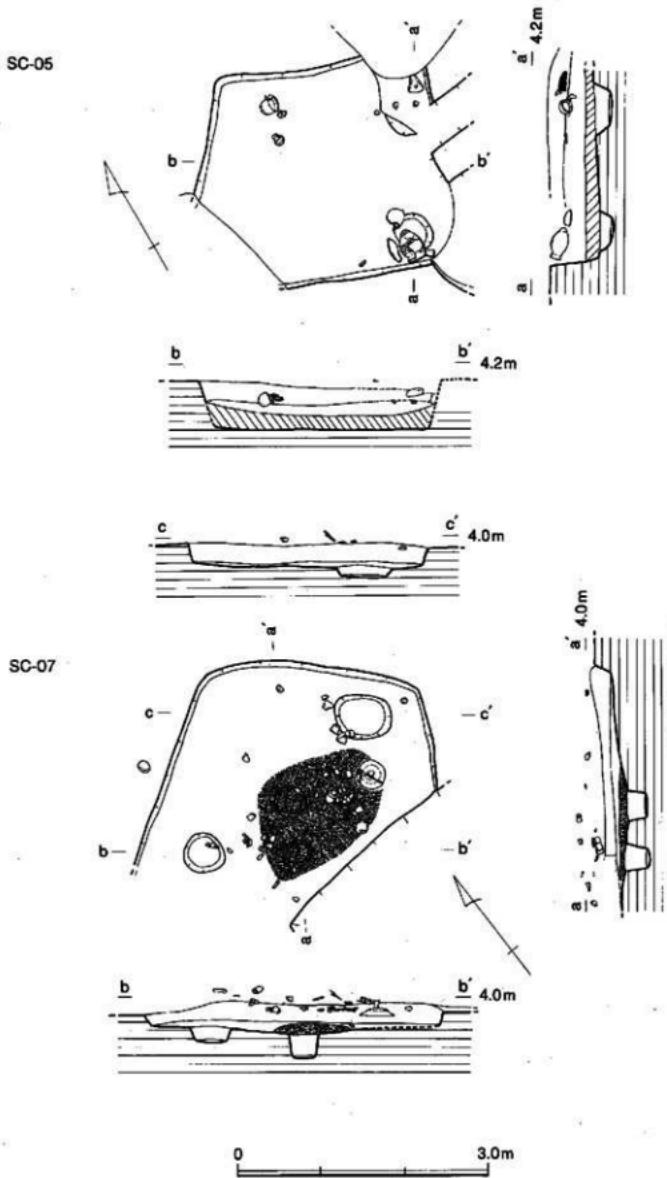


Fig. 8 6 次調査区SC-05, SC-07遺構実測図 (縮尺1/60)

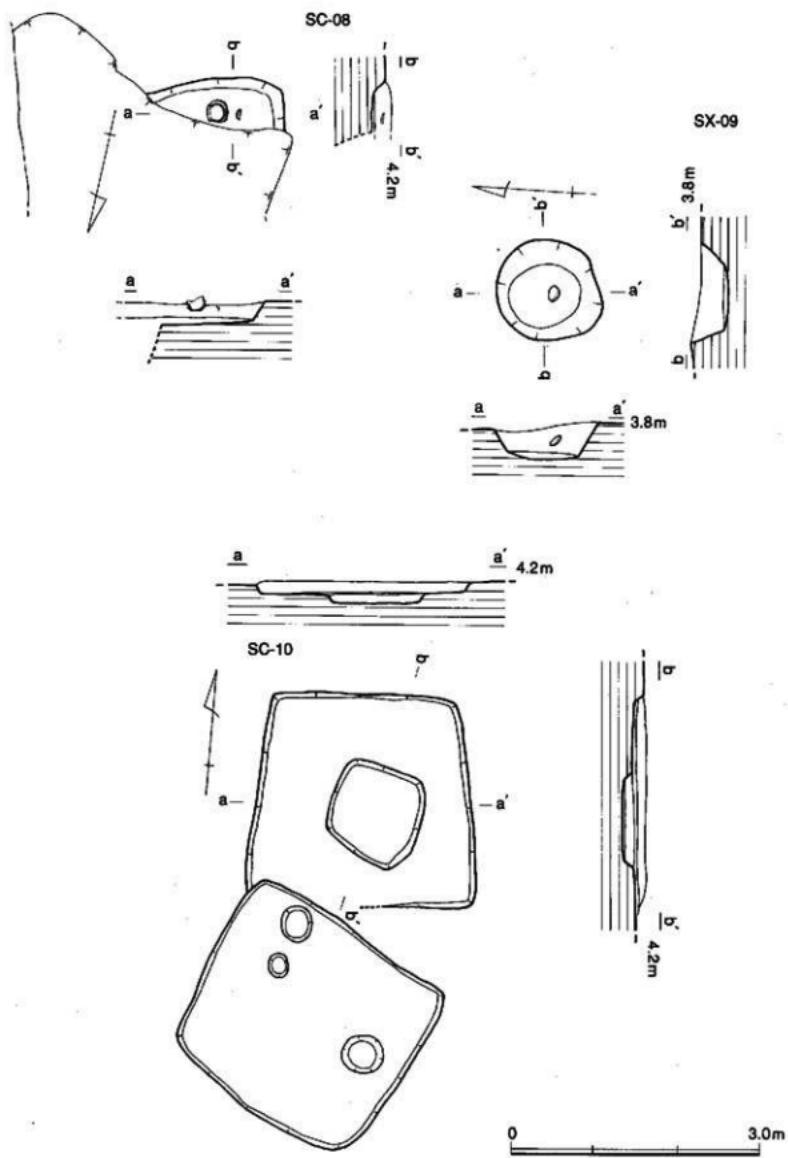


Fig. 9 6次調査区SC-08, SX-09, SC-10遺構実測図 (縮尺1/60)

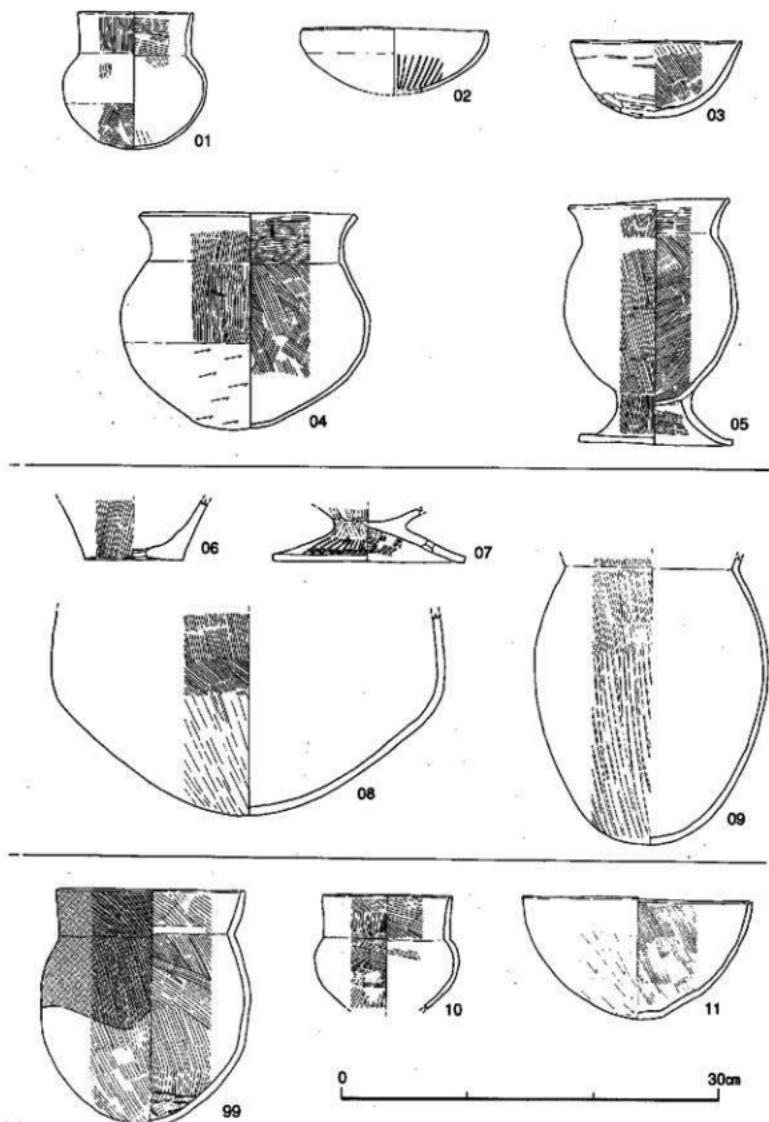


Fig.10 6 次調査区SC-01, SC-03, SC-04出土遺物実測図 (縮尺1/4)

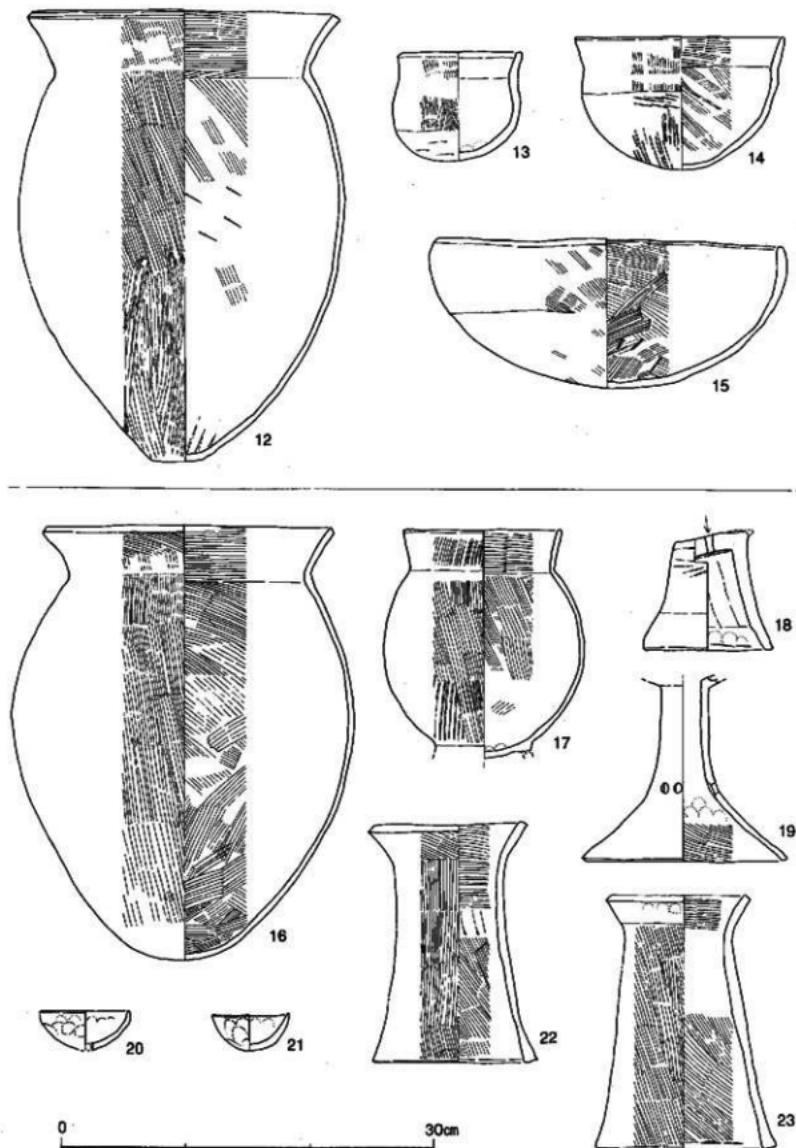


Fig.11 6次調査区SC-05, SC-06出土遺物実測図(縮尺1/4)

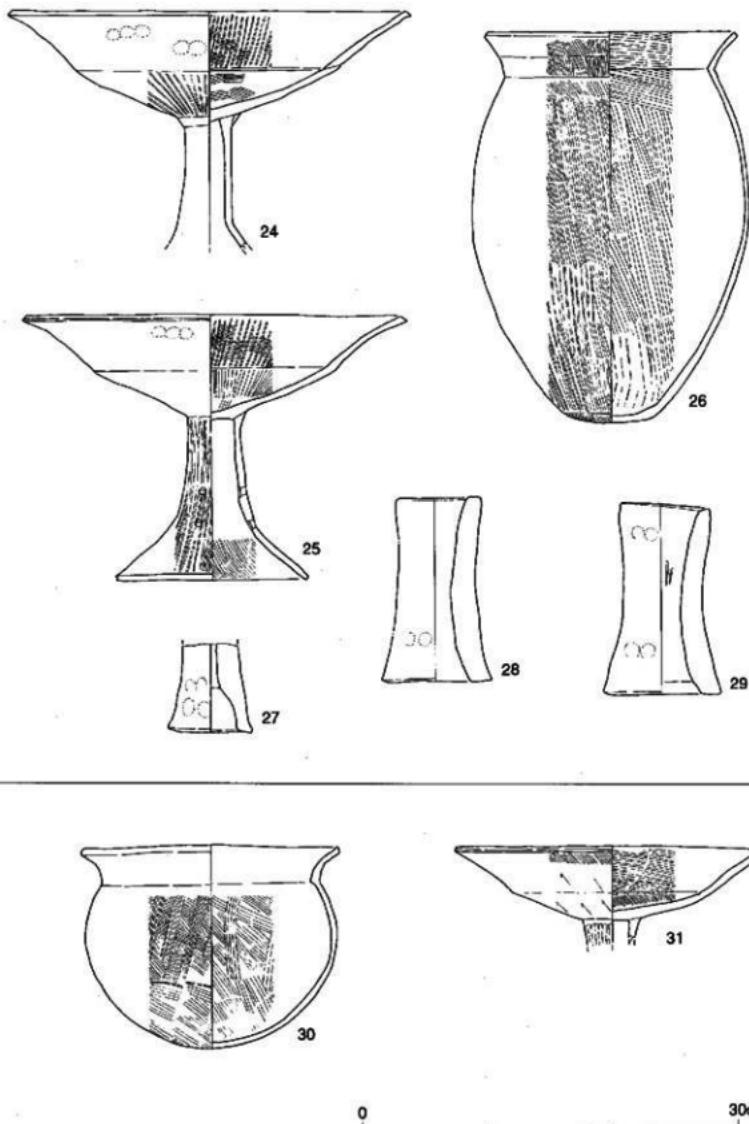


Fig.12 6次調査区SC-07, SC-08出土遺物実測図 (縮尺1/4)

出土遺物 遺構検出面と住居跡出土の遺物について述べよう。遺物の時期は、弥生中期後半と弥生終末期に集中している。また今回図示しえなかつたが、近世の陶磁器類も出土した。土器については観察表を参照されたい。ここでは漁撈関係の遺物である石錘についての所見を記す。

39は、SC-05の北東隅で出土した漁網用の大型の石錘である。黄褐色の三角形方柱形の自然砾に両面穿孔を施している。重量は4.35kgをはかる。

40は、遺構検出時に出土した石錘である。扁平な自然石の端部4か所を打ち欠いて紐を十文字に掛けられるように加工している。重量は180.5gである。

41は、SC-05出土の砂岩製の石錘である。ややすんぐりした紡錐形の体部を呈し、長軸に沿って溝が回る。重量は4.4gである。

42は、SC-07出土の砂岩製の石錘である。紡錐形の体部をもち、長軸に沿って溝が回る。重量は8.5gと軽量である。

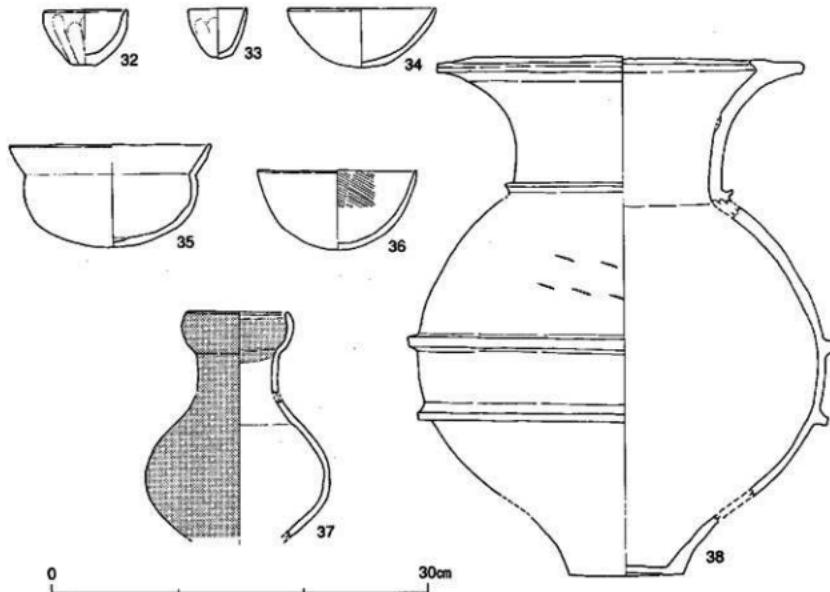


Fig.13 6次調査区包含層・検出面出土遺物実測図（縮尺1/4）

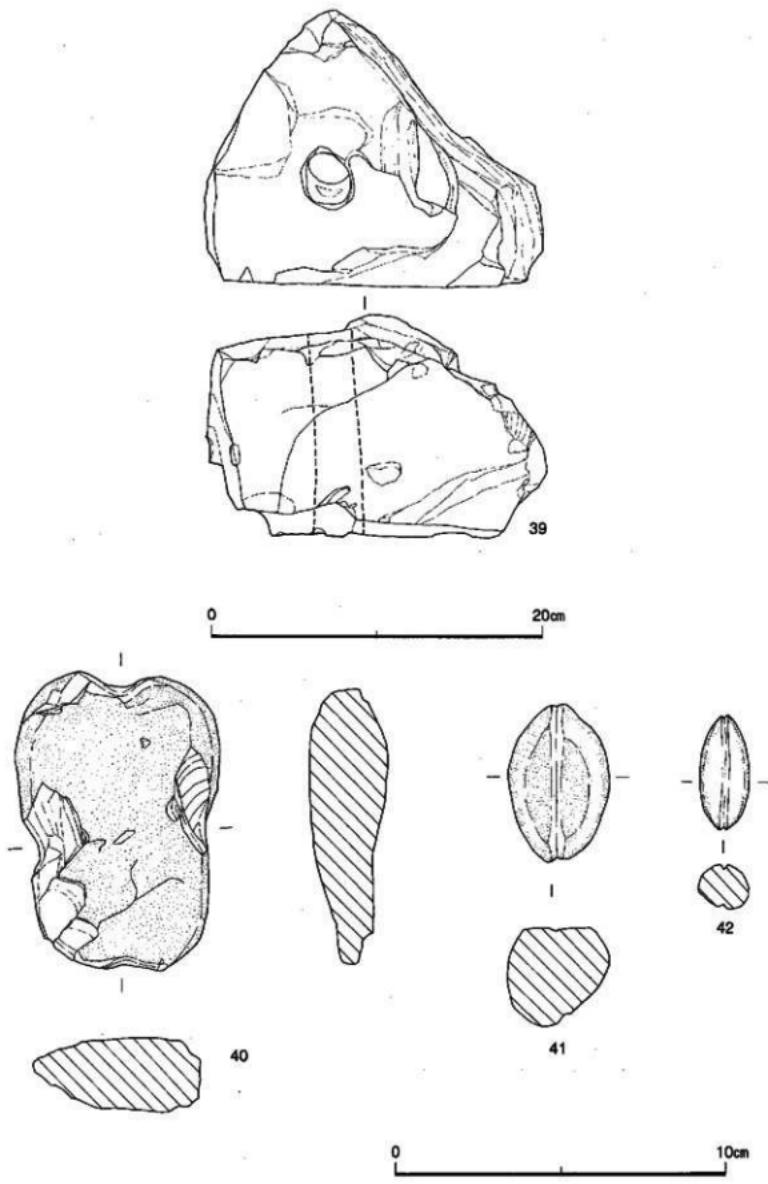


Fig.14 6 次調査区出土漁撈関連遺物実測図 (縮尺1/3, 2/3)

番号	器種	遺構	サイズ	①基部	②口径	脚輪	③色調	④土質	⑤焼成	⑥内面調査	備考	登録番号
01 小壺	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00102
02 壷	+	⑩15.6	⑪5.4	⑫	⑬灰褐色	⑭石英等の粒状・雲母の細粒を含む	⑮良好	⑯ハケ目後まで	⑰ハケ目後まで	⑱		00105
03 壷	+	⑩14.3	⑪6.6	⑫	⑬黄褐色	⑭石英等の粒状を多く含む	⑮良好	⑯ハケ目	⑰ハケ目	⑱		00104
04 壺	+	⑩18.5	⑪8.2	⑫	⑬褐色	⑭石英・長石の粗粒を多く含む	⑮良好	⑯ハケ目	⑰ハケ目	⑱		00103
05 台付壺	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00101
06 斜床壺	SC - 05	⑩	⑪7	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00105
07 壶(鉢形)	+	⑩16.0	⑪45	⑫	⑬褐色	⑭石英等の粒状を含む	⑮良好	⑯ハケ目	⑰ハケ目	⑱	空孔あり	00101
08 大壺?	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00102
09 長削型	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00104
10 小壺	SC - 04	⑩10.8	⑪2	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00102
11 茶	+	⑩10.5	⑪10.2	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00101
12 長削型	SC - 05	⑩25.0	⑪36.2	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	豆みがあらうまく接合しない	00101
13 茶	+	⑩1.9.3	⑪8.7	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00104
14 茶	+	⑩17.0	⑪10.6	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00103
15 茶	+	⑩28.0	⑪44.0	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00102
16 長削型	SC - 06	⑩23.2~23.8	⑪34.8	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	葉を付す	00101
17 台付壺	+	⑩12.7	⑪18.3	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	葉を付す	00102
18 高杯(鉢形)	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00106
19 高杯(鉢形)	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	対となった足元を二ヶ所に	00103
20 茶	+(土土)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	手づくな	00108
21 茶	+(土土)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	手づくな	00107
22 支脚	+	⑩12.8	⑪13.3	⑫19.2	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00105
23 支脚	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00104
24 高杯	SC - 07	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	なでなめ文面(唐城が美しい)	00102
25 高杯	+	⑩30.5	⑪21.2	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00106
26 長削型	+	⑩19.5~20.3	⑪31.3	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00101
27 支脚	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	失失後も使用したと思われる	00105
28 支脚	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00104
29 支脚	+	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00103
30 茶	SC - 08	⑩20.5	⑪16.3	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00101
31 高杯(直筒)	+	⑩25.0	⑪7	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱		00102
32 茶	包含層	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	手づくな	00106
33 茶	包含層	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	手づくな	00105
34 茶	包含層(区)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	手づくな	00102
35 茶	包含層	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	内外面丹振り	00107
36 茶	包含層(区)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨		00101
37 茶	後出層(区)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	内外面丹振り	00103
38 茶	後出層(区)	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	片面に小動物の牙食がある	00104
39 茶	SC - 04	⑩19.5	⑪15.8	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	内・面上手に蓋を行す	00103

Tab.1 6次調査区出土遺物観察表

第3章 西新町遺跡7次調査

遺構の分布 調査区内の砂層上面の標高は4m前後で、最も高い部分で4.47mである。中央部に井戸による擾乱がある。遺構形成時の旧況をはかる目安として1号墓棺の表面にみられる小動物の牙齒痕跡は、墓棺の一部が露頭した時期があったことを示唆するものである。また比較的遺存度のよい3号住居跡の掘形の状況をみると、大変締まりがよく、当時の生活面に近いものと考えられる。したがって遺構が形成された弥生時代中期後半から弥生時代終末にかけても、砂層の上面は、4mを若干上回る程度で推移したと推定される。

検出された5基の墓棺墓は、すべて調査区の南側に分布していた。集団墓としての墓棺墓は、東接する1次調査区で小児墓棺、北東部の2次調査で成人用墓棺と小児墓棺の分布が確認されていた。このため墓域は南側に移行するにつれて縁辺の様相を呈すると理解していたが、西接する10次調査区で成人棺を含む墓棺墓約30基が、調査されるに及んで再考を迫られることになった。

墓棺墓

K-01 調査区の最も北で検出された小児墓棺墓である。接口式で、埋置方位はN-84°-E、埋置角度は33°である。下蓋に穿孔がみられる。墓壙の掘形は不明である。

K-02 調査区の南東部で検出された小児墓棺墓である。上蓋に頭部上半を打ち欠いた蓋を用いている。呑口式で、埋置方位はN-37°-

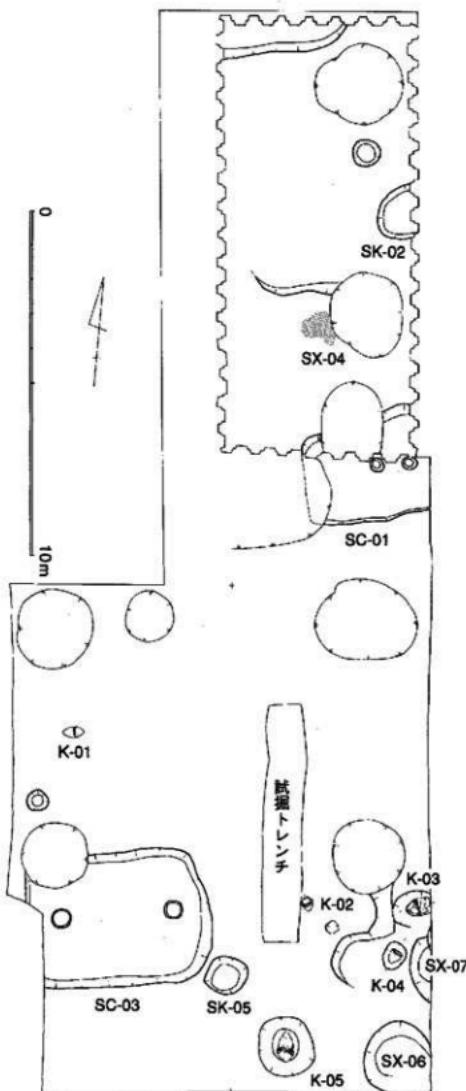


Fig.15 西新町遺跡7次調査区遺構配置図 (縮尺1/150)

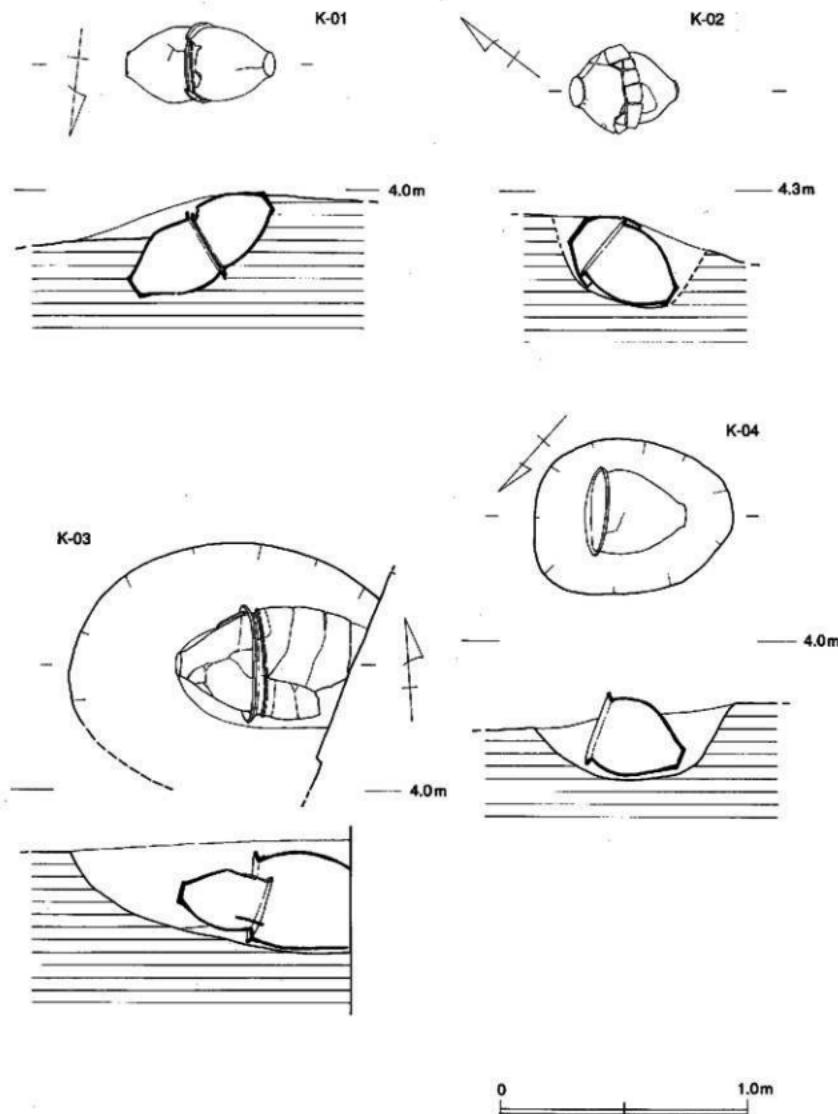


Fig.16 7次調査区1~4号墓基実測図(縮尺1/20)

W、埋置角度は 33° である。上壺に穿孔がみられる。墓壙の掘形は不明である。

K-03 調査区の南東部で検出された小児壺棺墓である。上壺が下壺に収まるタイプの呑口式で、埋置方位はN- $86^{\circ}-W$ 、埋置角度は約 6° である。下壺は隣接地の工事によって下半部は擾乱を受けている。墓壙の掘形は不明である。

K-04 調査区の南東部で検出された小児壺棺墓である。単棺で、埋置方位はN- $48^{\circ}-E$ 、埋置角度は 19° である。墓壙の掘形は不明である。

K-05 調査区の南東部で検出された小児壺棺墓である。上壺に胸部上半を打ち欠いた壺を用いている。接口式で、埋置方位はN- $6^{\circ}-W$ 、埋置角度は約 5° である。下壺の胸部外面に煤の付着がみられる。墓壙の掘形は不明で、図に示したのは便宜的なものである。

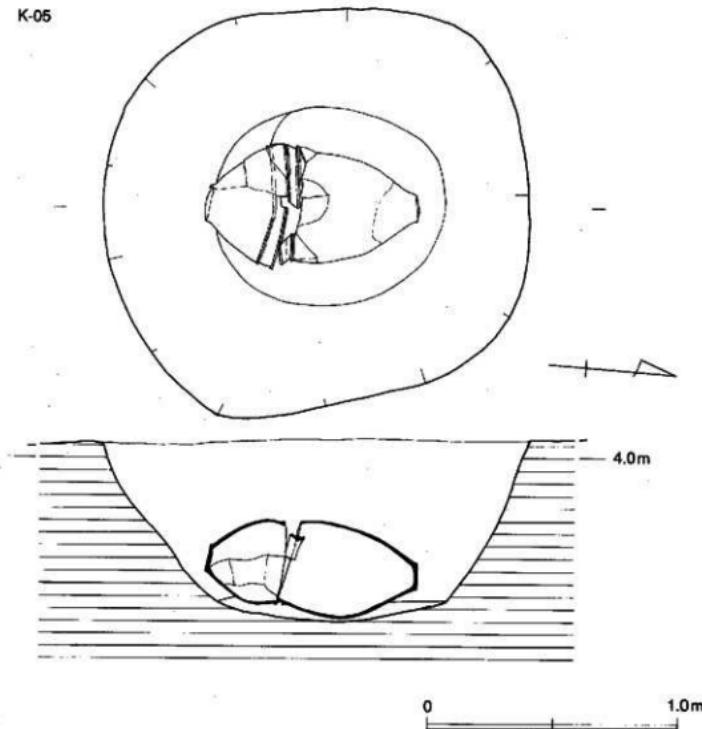


Fig.17 7次調査区 5号壺棺墓実測図（縮尺1/20）

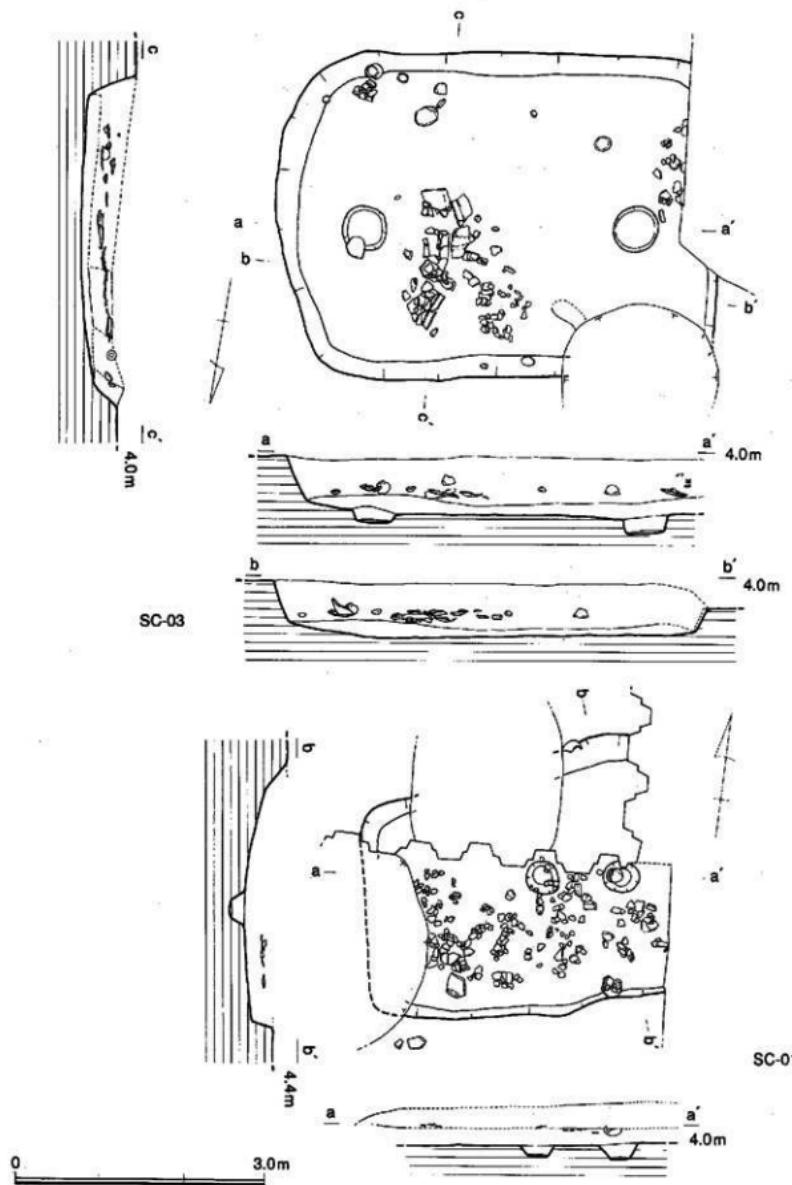


Fig.18 7次調査区SC-01, SC-03遺構実測図(縮尺1/60)

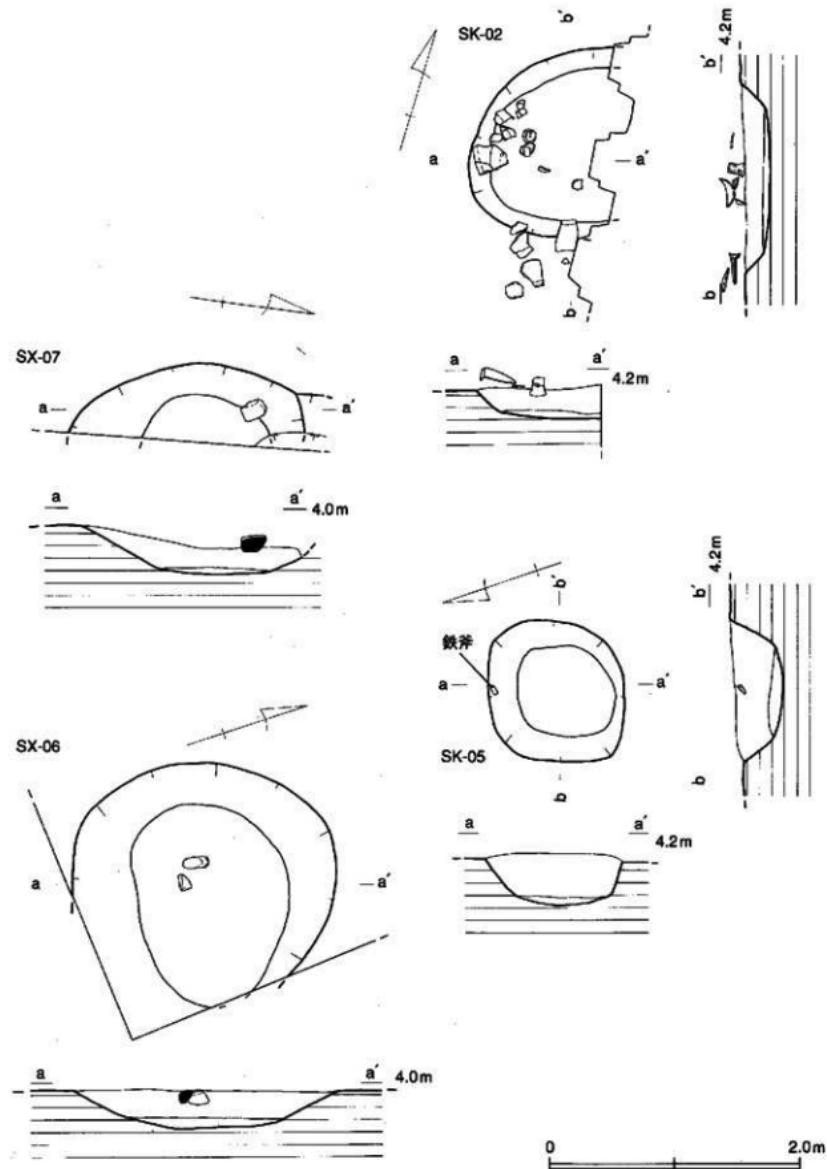


Fig.19 7次調査区SK-02, SK-05, SX-06, SX-07遺構実測図 (縮尺1/40)

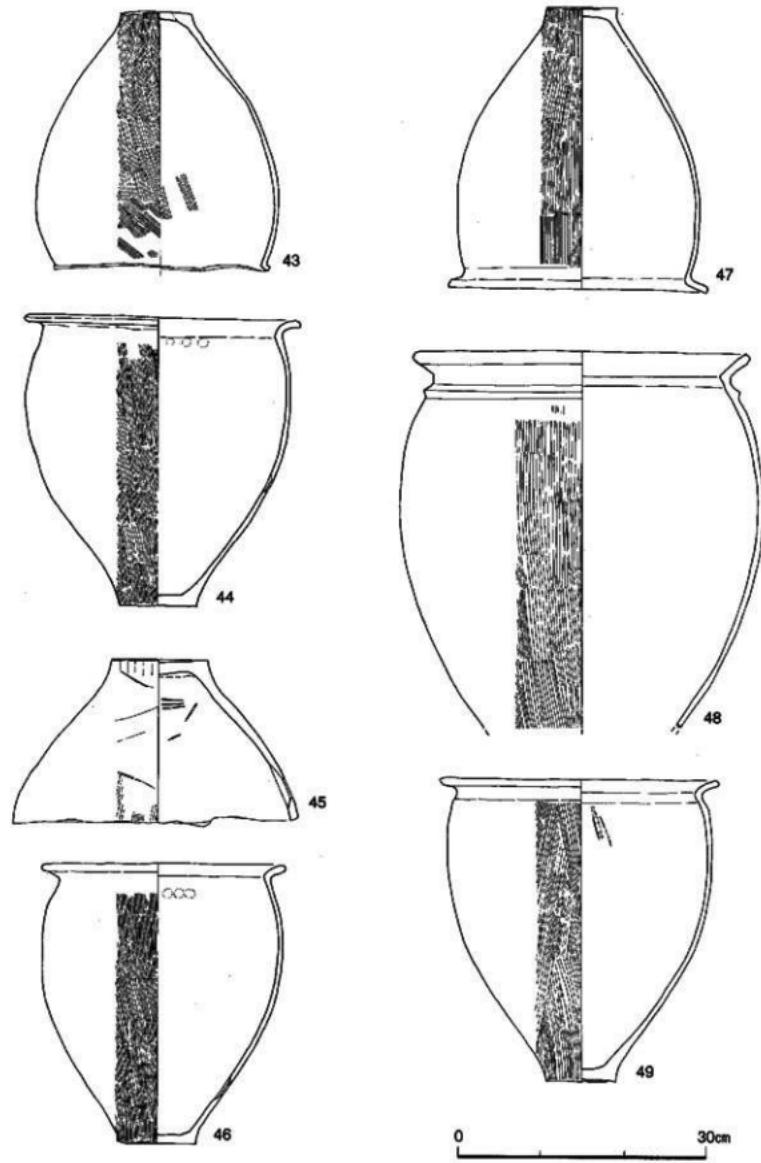


Fig.20 7次調査区1~4号壺実測図（縮尺1/6）

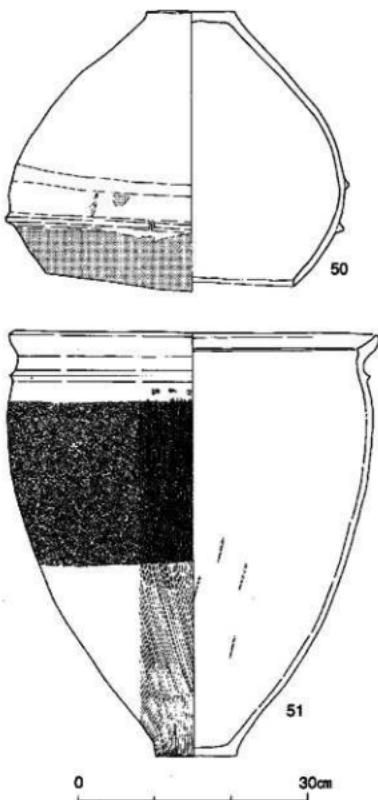


Fig.21 7次調査区5号窓棺実測図（縮尺1/6）

住居跡ほか

S C - 0 1 調査区中央部で検出された長方形プランの住居跡である。長軸は不明だが3.8 m以上、短軸は3.2 m程度である。床面の低い部分と壁面の上部との比高差は、約50 cmをはかる。柱穴は、ほぼ長軸上に2か所確認できたが、柱間が1 mほどしかなく、主柱穴とするのは無理であろう。黒色の覆土には、土器が多く含まれていた。土器の出土状況は、個体別に6ブロックほどに分かれていた。また覆土から碧玉製管玉1点が出土した。

S K 0 2 調査区の北東部で確認された梢円形の土坑である。土器がまとまって検出されたことからその周囲を徐々に掘り下げたところ土坑の存在が明らかとなつた。東側を隣接地に切られている。覆土は、やや褐色を帯びた砂である。東西に長いプランとすると、長軸は不明、短軸は1.6 m程度であろうか。まとまった土器片は何れも底から浮いた状態で検出された。

S C - 0 3 調査区の南西で確認された隅丸長方形プランの住居跡である。調査当初、この上にはユニットハウスが置かれていたが、黒色土から鉢や壺の一部が現われたため、遺構の存在を想定し、ハウスを移動した結果検出した。

遺構の遺存状況は、思いのほか良好で、

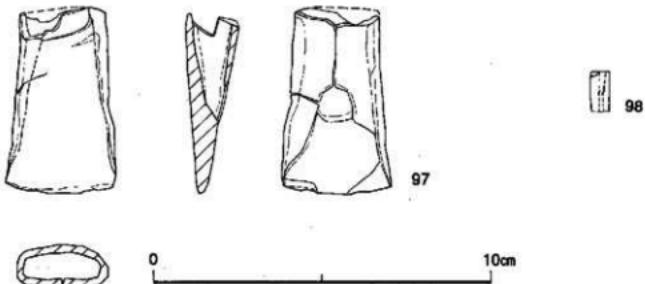


Fig.22 7次調査区出土遺物実測図（縮尺2/3）

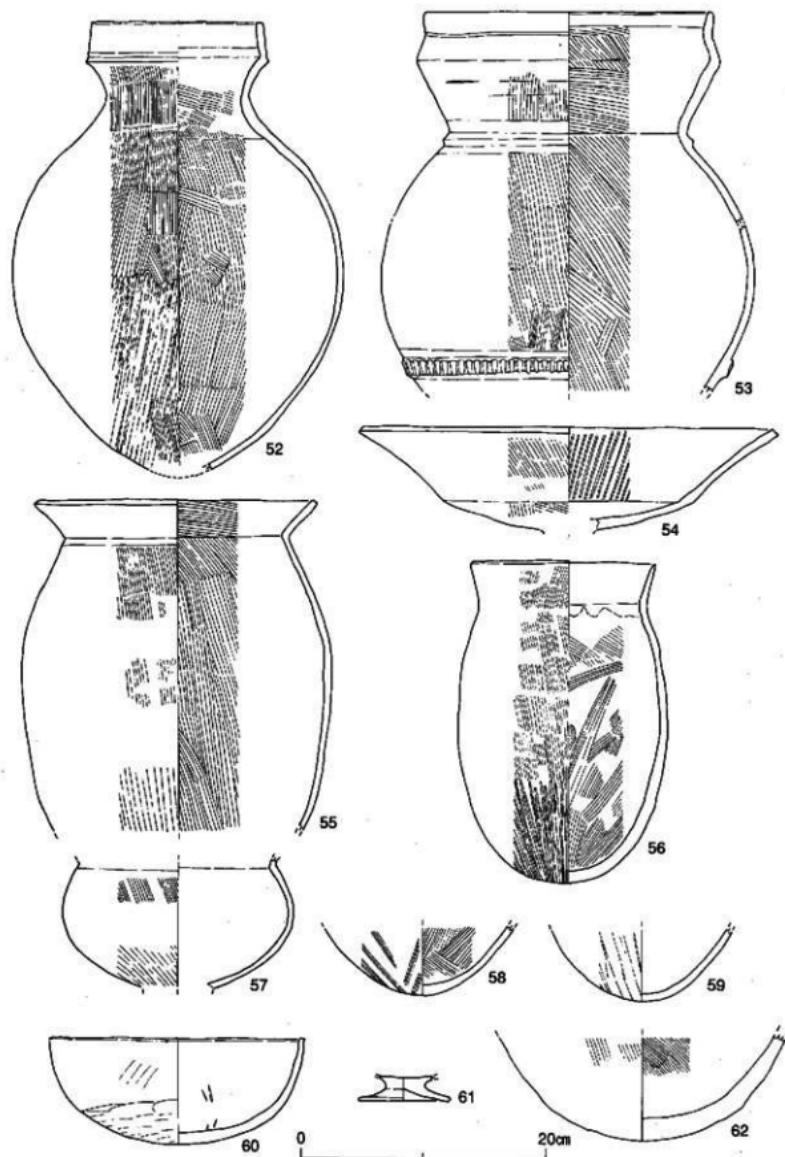


Fig.23 7次調査区SC-01出土遺物実測図（縮尺1/4）

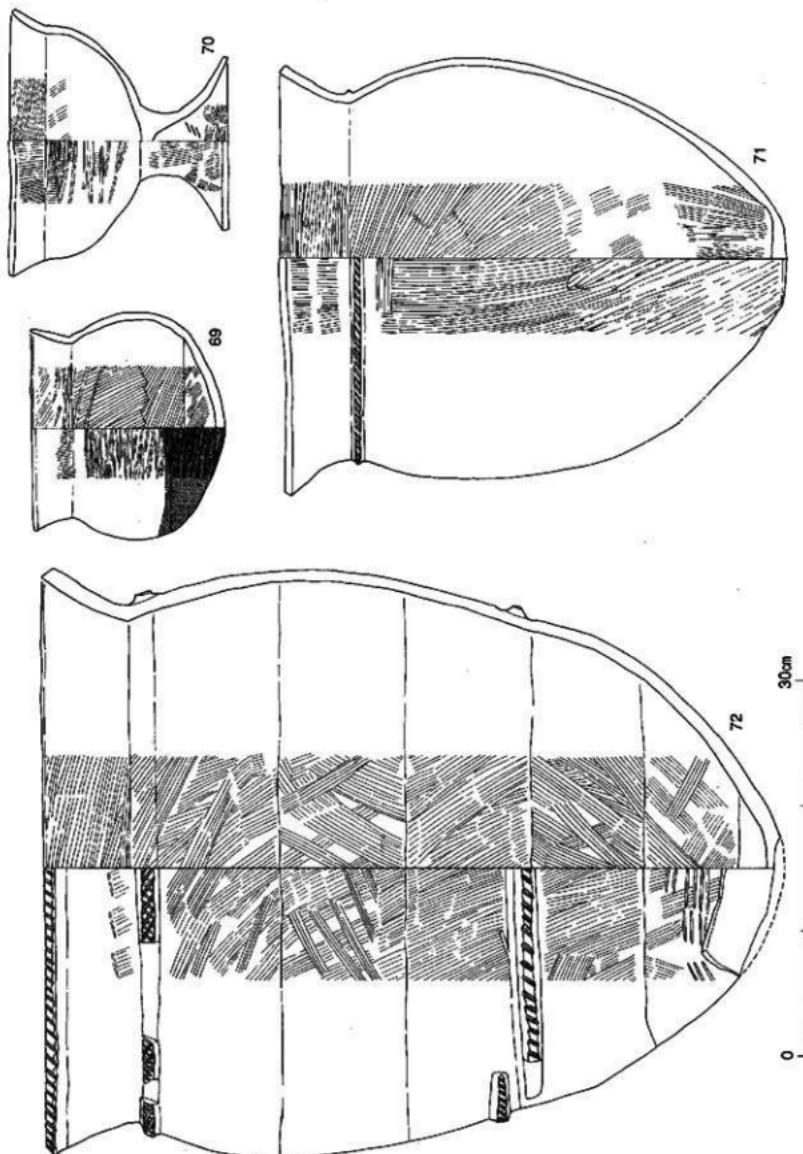


Fig.24 7次調査区SC-03出土遺物実測図1 (縮尺1/4)

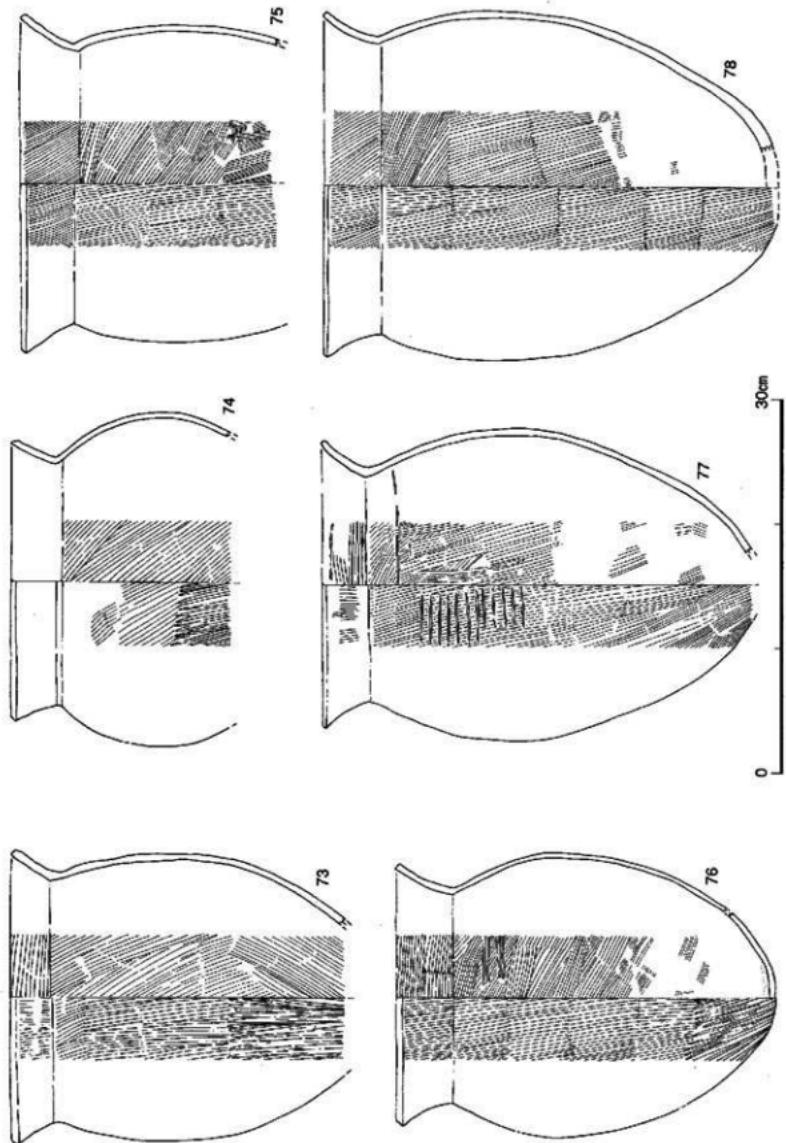


Fig.25 7次調査区SC-03出土遺物実測図2 (縮尺1/4)

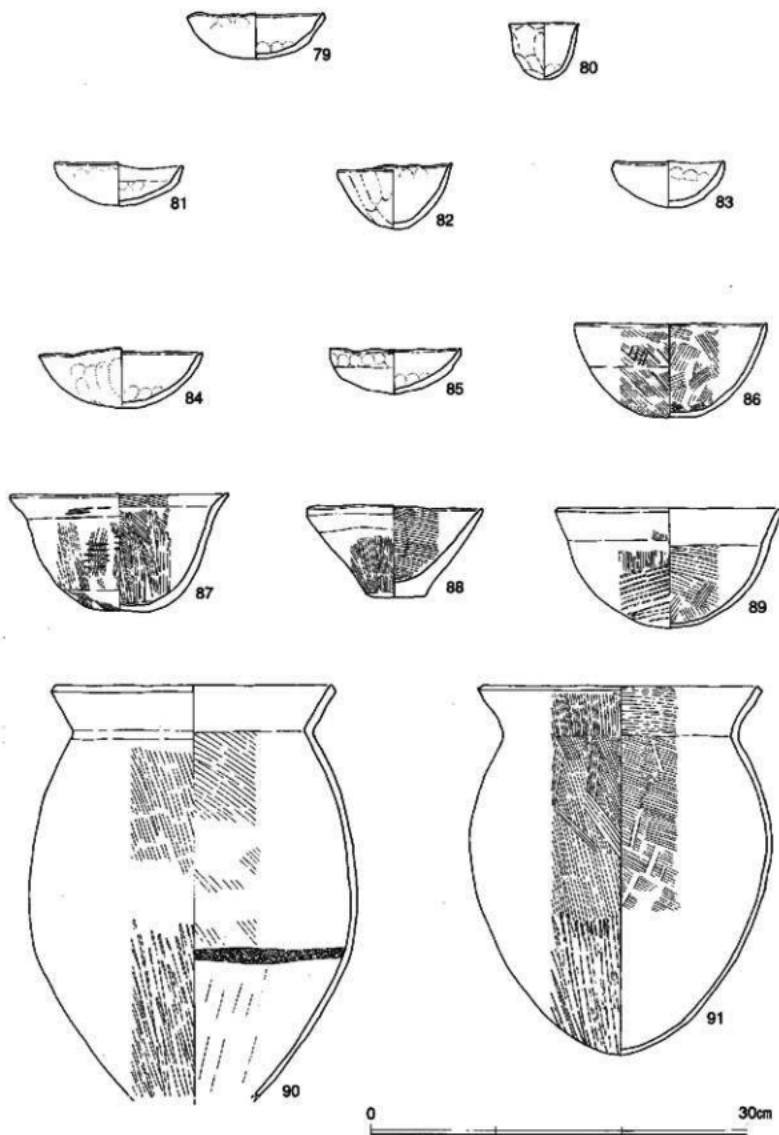


Fig.26 7次調査区SC-03出土遺物実測図3 (縮尺1/4)

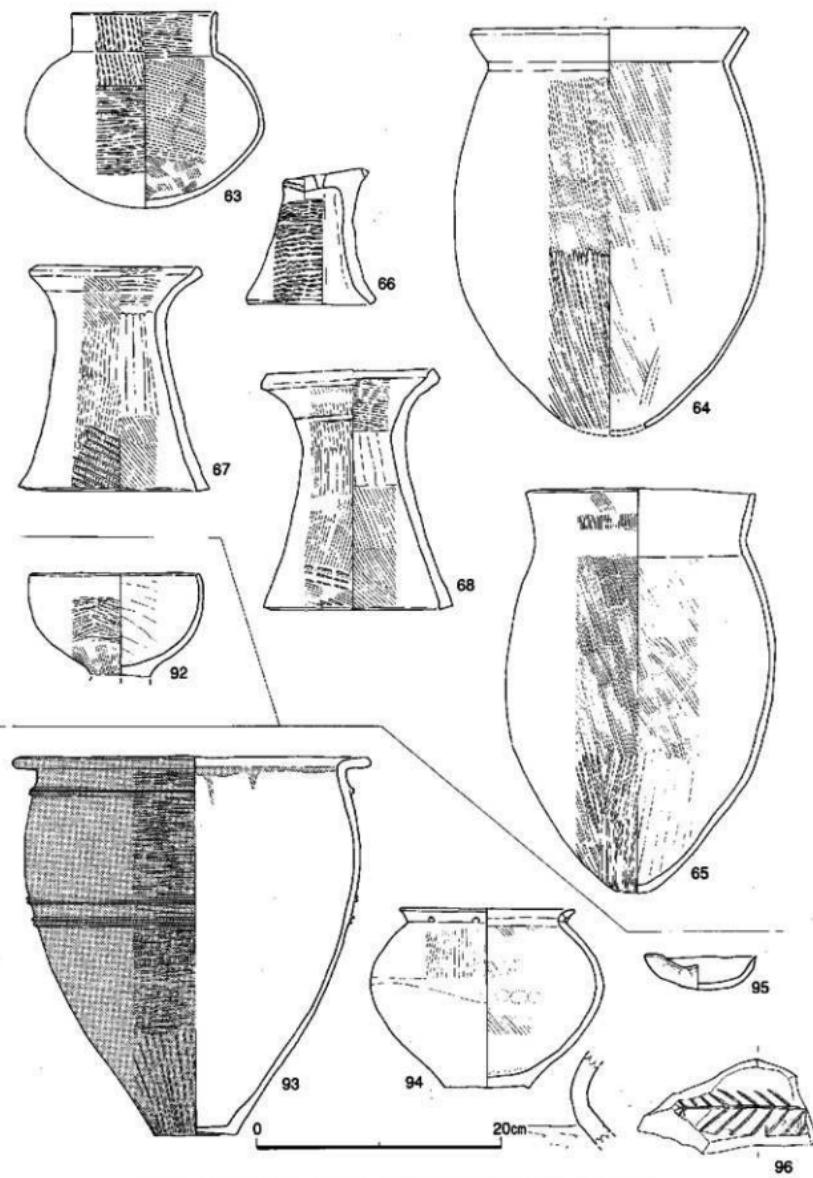


Fig.27 7次調査区SK-02, SX-04検出面出土遺物実測図（縮尺1/4）

事前の杭工事による搅乱を受けていたものの全容を確認することができた。長軸は 5.65 m、短軸は 4.2 m をはかる。柱穴は、長軸上に 2 か所確認できたが、柱間は 3.4 m ほどあり、2 本柱構造の主柱穴である。壁面の掘形から柱穴が確認できた床面までの比高差が 70 cm ほどある。また掘方に沿った壁面は堅く締まっており、砂質にもかかわらず縁を歩いても壊れないほどであった。遺物の中、鉢の多くは、完形に近く、主柱穴の間で検出された大甕もほぼ完形に復元できた。覆土は黒灰色で、黄灰色となる面を住居の床面とするなら、遺物は、15 cm 程度浮いた状態といえる。甕は外側に煤が付着していたが、焼土や炉跡に相当する構造物は確認できなかった。位置的には、後述する SK-05 との関連を求める。

SX-04 調査区の北側で確認された焼土と土器の細片からなる性格不明の遺構である。遺構の下面から台付鉢の破片が出土した。

SK-05 SC-03 の東南隅に位置する隅丸方形の土坑である。長軸 1.12 m、短軸 1.08 m で深さは、約 40 cm をはかる。覆土中に大量の炭化物を混入しており、北側の掘形に近い部分で鋳造鉄斧が検出された。調査時、この遺構は隣接する SC-03 に関連するものという感触を得た。しかし周囲で鐵滓や繩の羽口は出土しておらず、鉄器などの加工に関わるとする積極材料は認められなかつた。

SX-06 調査区の南東隅で確認された不整円形の土坑である。径は短軸で 2.1 m 程度、深さは、30 cm をはかる。覆土は黒色の砂よりなる。上面に礫が浮いた状態で検出された。土器片など時期を決定できる遺物は出土していない。

SX-07 調査区の南東部で確認された不整形の土坑である。隣接地や甕棺墓の掘形に切られているため本来の規模を推定できない。覆土は、やや褐色を帯びた砂である。上面で浮いた状態で検出された礫は、形状から一種の石皿に類する石器である。

出土遺物 土器以外の特記すべき遺物として鋳造鉄斧と碧玉製管玉がある。

鉄斧(97)は、3 号住居跡(SC-03)に隣接する土坑(SK-05)の上面で検出された。全長 6.2 cm、刃部幅 3.5 cm、袋部幅 3.0 cm をはかる。袋部の一部を欠失する。

碧玉製管玉(98)は、1 号住居跡の覆土から出土したものである。全長 1.36 cm、上端部幅 0.63 cm、下端部幅 0.62 cm をはかる。両面穿孔である。色調は深緑を呈した、典型的な弥生時代の管玉である。住居跡の時期は西新式土器の新段階にあたるが、当該期の資料としては不自然であり、むしろ甕棺墓の被葬者の装身具が何らかの要因で混入したものと理解したい。

番号	器種	遺構	サイズ	①基高	②口径	特徴	③色調	④内面調査	⑤外面調査	備考	登録番号	
43	甕	K-01(上)	①	23.0	②	③	④	⑤	⑥	0001		
44	甕	+	(下)	29.3	23.5	①	②	③	④	⑤	0002	
45	甕?	K-02(上)	①底	11.8	②	③	④	⑤	⑥	外置に唇痕がある	0003	
46	甕	+	(下)	?	?	①	②	③	④	⑤	0004	
47	甕	K-03(上)	①底	14.4	24.1	①	②	③	④	⑤	0005	
48	甕	+	(下)	16.4	?	①	②	③	④	⑤	0006	
49	甕	K-04(上)	②底	28.2~34.3	26.7	①	②	③	④	⑤	0007	
50	甕	K-05(上)	①底	11.4	?	①	②	③	④	⑤	0008	
51	甕	+	(下)	34.5~47.7	33.2	①	②	③	④	⑤	0009	
										縁を付す	0010	

Tab.2 7 次調査区出土遺物観察表1

番号	器種	通典	サイズ①基高	②口径	特徴	④色調	⑤地質	⑥性成	⑦内面調整	⑧外面調整	備考	登録番号
52 壺		SC-01	①14.0	②86.5	③	④黄灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目~なで						00101
53 壺		*	①	②	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目						00111
54 高杯		*	①34.5	②	③	④褐色~灰褐色⑤砂粒を含む⑥良好⑦ハケ目~なで⑧ハケ目						00109
55 長颈壺		*	①	②	③	④黄灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑤やや亂い⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目						00105
56 長颈壺		*	①16.0	②26.4	③	④淡灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③二次焼成によって器壁は後削⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目						00103
57 台付体		*	①	②	③	④黄灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑤やや亂い⑥なで⑦面剥が害しい⑧ハケ目(二次焼成による)剥落が進む~なで						00104
58 瓷底座		*	①	②	③	④内(黄灰色)外(褐色)⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④ハケ目⑤ハケ目後なで						00106
59 瓷底座		*	①	②	③	④黄灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑤良好⑥なで⑦なで				外側に墨を付す		00107
60 体		*	①21.0	②8.8	③	④黄灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑤良好⑥ハケ目後なで⑦ケメリ後なで~底部ケズ						00102
61 台付体(脚部)		*	①	②	③	④乳白色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③良好④なで⑤なで						00108
62 大腹底座		*	①	②	③	④内(黄灰色)外(褐色)⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む③やや軟質⑥ハケ目⑦ハケ目				内面に赤色顔料を付す		00110
63 壺	SK-02	①12.0	②16.0	③	④茶灰色⑤雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後ミガキ							00202
64 長颈壺		*	①	②	③	④茶灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後なで				墨を付す		00204
65 長颈壺		*	①19~21.0	②33.2	③	④石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む⑤良好⑥ハケ目⑦ハケ目後なで						00201
66 支脚		*	①11.2	②11.1	③	④茶灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む⑥良好⑦なで⑧タキ						00203
67 番台		*	①14.0	②18.4	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦なで⑧ハケ目						00205
68 番台		*	①14.6	②19.7	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧タキ後ハケ目						00206
69 指揮査	SC-03	①16.2	②15.3	③	④淡褐色⑤雲母の細粒を多く含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後なで					底部に墨を付す。蓋に使用。	00309	
70 台付鉢		*	①21.5	②17.5	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後なで						00302
71 長颈壺		*	①14.4	②40.5	③	④茶灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後なで						00310
72 大腹		*	①46.6	②58.8	③	④黄褐色~褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目				突端は重ならずずれる		00312
73 長颈壺		*	①23.6	②	③	④茶灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目						00313
74 長颈壺		*	①	②	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後なで						00322
75 長颈壺		*	①	②	③	④淡褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後なで						00323
76 長颈壺		*	①21.0	②30.4	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目						00319
77 長颈壺		*	①23.0	②34.5	③	④茶灰色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を多く含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目						00311
78 長颈壺		*	①	②	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目				内面及び外底部に赤色を寄せる		00321
79 体		*	①11.0	②3.8	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧				手づくね		00316
80 体		*	①5.6	②4.6	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧				手づくね		00315
81 体		*	①10.2	②3.4	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧				手づくね		00306
82 体		*	①9.0	②5.3	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧				手づくね		00301
83 体		*	①9.0~9.5	②3.7	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧様なで⑨様なで				手づくね		00305
84 体		*	①4.9	②13.0	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧				手づくね		00314
85 体		*	①10.3	②3.7	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧				手づくね		00307
86 体		*	①7.5	②15.0	③	④暗褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧ハケ目(焦げ原体によるタキナ)						00318
87 体		*	①17~17.5	②9.4	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目後ヘラミガキ⑧タキナ						00309
88 体		*	①13~14.0	②7.3	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目						00308
89 体		*	①18.0	②9.6	③	④黄褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目⑧ハケ目後なで						00317
90 長颈壺		*	①	②	③	④暗褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目後なで⑧ハケ目後なで				底部外面に墨を付し、内面に 炭化物が帯状に付着		00304
91 長颈壺		*	①22.8	②29.4	③	④暗灰褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目後なで⑧ハケ目				外面上に墨を付す。内面底部に 炭化物が付す		00320
92 台付体	SX-04	①13.8	②	③	④暗褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目後なで⑧なで							00304
93 壺	検出面	①29.0	②30.9	③	④黄褐色⑤方柱状の黒色斑状を含む⑥良好⑦⑧ハケ目後研磨							00302
94 壺	検出面	①14.2	②14.6	③	④黄褐色~淡褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦ハケ目後なで⑧なで				一封の孔が封跡・			00301
95 体	検出面	①	②	③	④淡褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒を含む⑥良好⑦⑧				手づくね			00303
96 大腹	検出面	①	②	③	④淡褐色⑤石英等の粗粒・雲母の細粒の他、毛色の粗粒を含む⑥良好⑦崩落削り⑧ハケ目後研磨等岩肌状を留ます				山陰系土器			00305

Tab.3 7次調査区出土遺物観察表2

第4章 まとめ

今回の2地点の調査区は、西新町遺跡の南西部に位置している。調査区の南にはしる東西方向の道路は国道202号線が開通するまで唐津街道として機能していた。

西新町遺跡のこれまでの調査によって、Fig. 1に示すように東西と南北に主要道路に沿った状況が明らかとなつた。遺構は、弥生中期の壺棺墓と後期終末から古墳時代にかけての集落とに大別できる。

壺棺の時期は、何れも弥生中期後葉に比定される型式に属している。1~4号壺棺に使用された小型の壺形土器はすべて「く」字状口縁に移行する前段階の形態である。3号壺棺下壺はすでに「く」字状口縁である。中型以上の壺については、早良区の有田遺跡3次調査の井戸跡出土の壺や城南区丸尾台遺跡の前漢鏡や素環頸大刀を副葬した壺などを類例としてあげることができる。5号壺棺下壺のように内彎気味に屈曲する「く」字状口縁も、西新町遺跡2次19号壺棺の上壺にみられるように立岩式新段階の成人棺とセットとなる例が指摘できる。このように5次調査の壺棺墓に使用された容器は、口縁部が打ち欠かれた壺は時期決定に暖昧さをのこすものの、日常土器としては須玖式の最終段階、壺棺の型式としては先述した立岩式新段階の器種に併行する時期に位置づけることができる。また実年代としては一世紀中葉に近い時期と推定される。

次に集落について述べよう。弥生終末から古墳時代にかけての在来系土器は西新式と呼称されている。これまで筆者は出土例の多い在来系壺形土器の型式をもとに編年をおこなってきた。⁽¹⁾ その概要是凸レンズ状の不安定な底部の下大腰式新段階、尖底状の丸底のうち小さなコインほどの底部がつく西新I式古段階、尖底状の丸底が主体をなす西新II式新段階、胴部中位に重心がくる丸底の西新II式古段階から胴部下位に重心がくる丸底の西新II式新段階への変遷である。

遺構の時期を検出された土器によってあてはめると、土器相の範囲は、Tab. 4に示すようになる。出土遺物が少ないなどの理由で土器相の確定が難しい資料については破線で表現した。出土遺物のまとまつた7次調査のSC-01は、56のように下彎気味の胴部をもつ壺や屈曲部が脚柱部寄りに移行した高杯54のように西新II式新段階の特徴が強く窺える。52の壺は在来の複合口縁壺の系譜では理解できない要素も含んでいるようである。58・59のような胴部中位に重心がくると推定される器種がみられることから西新II式全般に幅をもたせた位置づけを行なった。SC-03については71のように重心が胴部上半で底部がのこるタイプから胴部中位に重心がくるタイプまでを含んでいることから幅をもたせざるを得なかった。

住居跡の構造について6次調査では各隅に4本の柱痕が検出されたSC-06は、床面積約15m²をはかり、他の2本柱穴が確認された住居跡の7~8m²と比べると規模が大きい。7次調査ではSC-01が長軸を4mとする約12m²、SC-03は長軸に沿った2本柱の構造ながら22m²の床面積を有しており、規模的にも中枢あるいは特殊な用途が想定される遺構である。

西新I式新段階から西新II式新段階にかけて山陰・畿内・朝鮮半島南部など外来系土器の流入がみられるようになる。このなかで外来系土器の構成比率が高い集落は、遺跡の北東部に集中する傾向があるといわれてきた。⁽²⁾ 今回の調査ならびに7次調査に接する10次調査の所見もこうした指摘を裏付ける結果となった。⁽³⁾ しかし土器の出土状況は遺棄されたといえる例が少ないので、該期の集団構成をどこまで反映するかは意見の分かれるところであろう。

- ※註
(1)常松幹雄「庄内式土器の時代(玄界灘沿岸)」
『考古学ジャーナル』No.363、1993
(2)田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」
『史洞』120輯、1983
(3)調査者の星山洋氏のご教示による。

土器相 遺構	下大腰式		西新I式		西新II式	
	新段階	古段階	新段階	古段階	新段階	
6 次 調 査	SC-01		↔		↔	
	SC-03				↔	
	SC-04				↔	
	SC-05	↔				
	SC-06	↔				
	SC-07	↔				
7 次 調 査	SC-08	↔				
	SC-01		↔		↔	
	SK-02	↔	↔		↔	
8 次 調 査	SC-03	↔	↔		↔	

Tab.4 出土土器の様相

SUMMARY

Nishijin-machi ruins are located in the north side of Sawara plain that faces Hakata bay. One of their characteristics is they are on the dune. According to the geological survey, the dune around there is said to have been formed at the end of Jomon period.

After the construction of the subway, many buildings were constructed along the main street. Looks of the town have made great changes.

During 1993 and 1994 campaign, we excavated 3 points of the ruins. On this report, we make a report on 6th and 7th survey. They are situated in the southwest of the ruins. And the distance between them is only 50 meters.

The main structural remains found there were jar burials and pit dwellings. At the 7th point, we found five jar burials. They consist of a part of the cemetery, and each burials are used for children. According to the shapes of the jar, they can be dated to the end of Middle Yayoi period.

Concerning about the dwellings, they belong to the end of Late Yayoi period. "Nishijinmachi type pottery" was named after these ruins.

At the 6th point, we found nine pit dwellings. Most of the plan for the dwellings are squares with two post holes. The floor space is seven or eight square meters. Especially dwelling No.6 has four post holes at each corners, and the floor space is 15 square meters.

At the 7th point, we found two pit dwellings. The plan for dwelling No.3 is elliptic and the floor space is about 22 square meters. There are two post holes on the long axis.

Although most of the potteries excavated there are composed of native ones, those from foreign districts are few in number. As such a tendency has been already pointed out, we recognized it again.

Except for potteries, an iron axe and stone net sinkers were found. The former is the result of intercourse with developed tequicus, the latter show us the activity for fishery.

At the end of this report, we greatly appreciate advices and aids by many people.

KEYWORDS:Ruins on the dune

Cemetery at the end of Middle Yayoi period ca.20~60A.D.

Pit dwellings at the end of Late Yayoi period ca.the3rd.c.A.D.

Nishijin-machi type pottery

図 版



◀(1) 6次調査区全景（南より）
▼(2) 6次調査区全景（北西より）



溝状遺構（東より）(3)▶

PL. 2



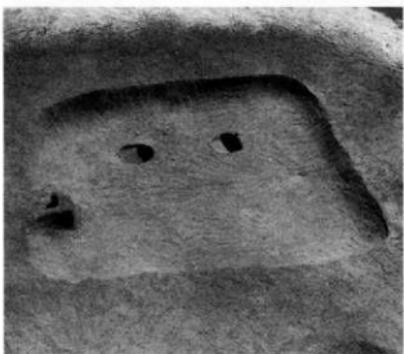
(1) SC-01 (東より)



(2) SC-02 遺物出土状況 (西より)



(4) SC-03 遺物出土状況 (西より)



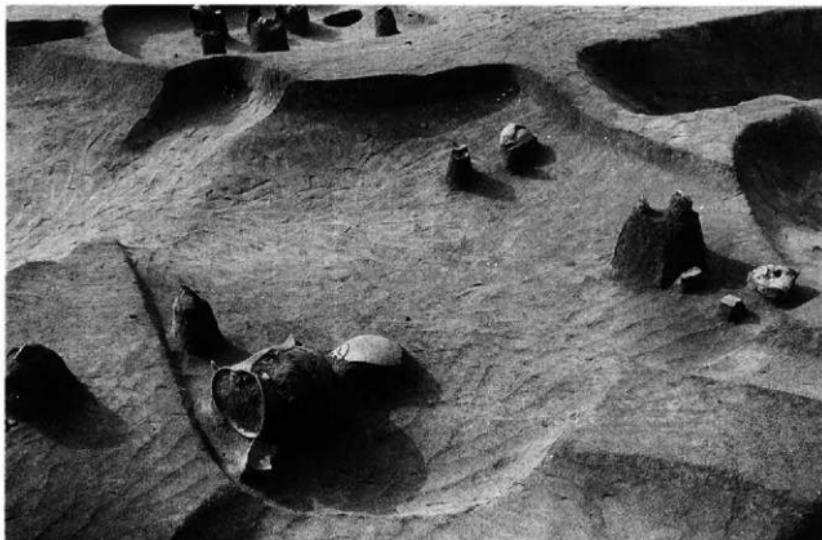
(3) SC-02 完整状況 (北より)



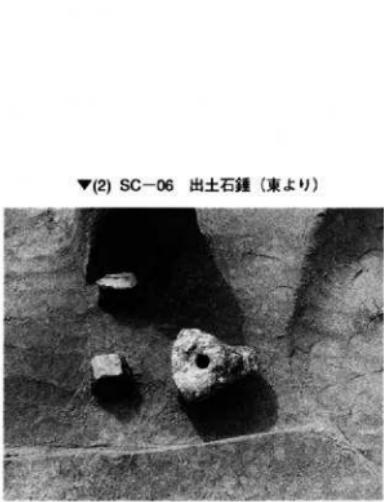
(5) SC-03 完整状況 (南より)



(6) SC-04 遺物出土状況 (南より)



▲(1) SC-05 (南東より)



▼(2) SC-06 出土石錘 (東より)



▲(3) SC-06 (北より)



◀(1) SC-06 遺物出土状況（北東より）



SC-06 完掘状況（南より） (2)▶



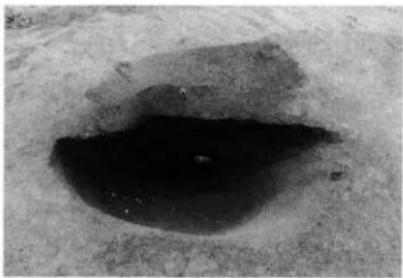
(3) 遺物出土状況（西より）



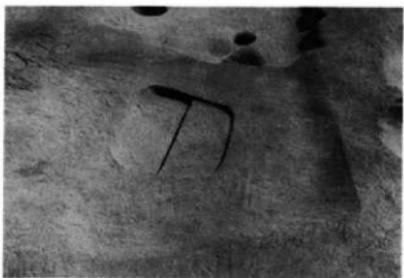
(4) 焼石出土状況（北より）



SC-07 完掘風景（西より）(1)▶
SC-07 遺物検出風景（東より）(2)▼



(3) SX-09 (北より)



(4) SC-10 (北より)

PL. 6

SC-01

SC-03

SC-04

SC-05



04



05



07



11



99



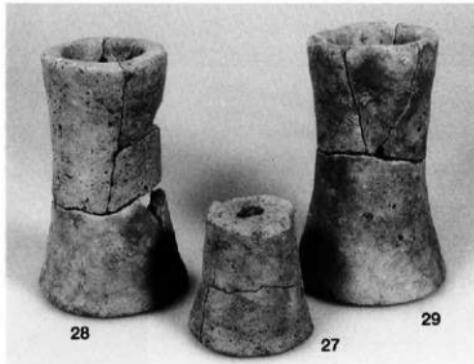
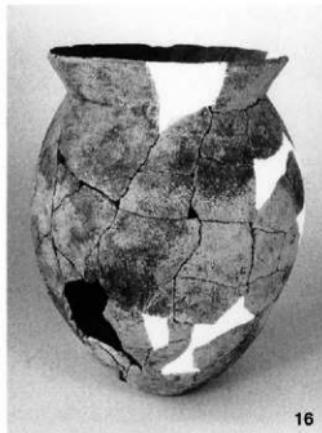
12



14



15



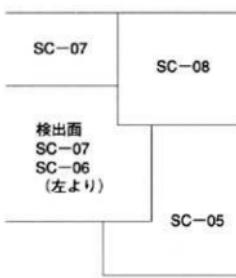
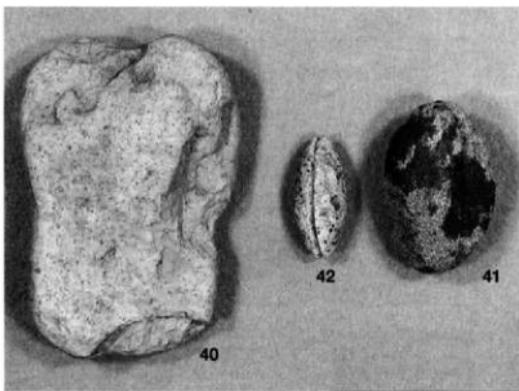
SC-06



SC-07

住居跡出土遺物 2

PL. 8



住居跡出土遺物 3



(1) 西新町遺跡 7次調査区全景（東より）



(2) 西新町遺跡 7次調査区南拡張区全景（東より）

PL. 10



◀(1) SX-04 全景（東より）



SK-02 全景（西より） (2)▶



◀(3) SC-01 全景（南より）



◀(1) SC-03 発掘作業風景（西より）
▼(2) SC-03 遺物出土状況（東より）



SC-03 実掘風景（東より）▶



▲(1) 1号壺棺墓出土状況（東より）



▲(2) 2号壺棺墓出土状況（南より）



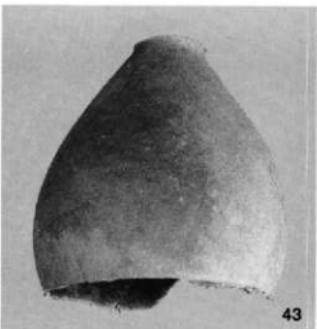
▲(3) 3号壺棺墓出土状況（北より）



▲(4) 4号壺棺墓（手前）出土状況（西より）



▲(5) 5号壺棺墓出土状況（西より）



43



45



44



46

▲ 1号壺棺（上・下）

▲ 2号壺棺（上・下）



47



48

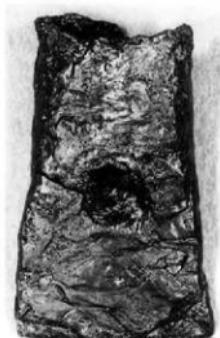
▲ 3号壺棺（上(左)・下(右)）



▲ 4号壺
5号壺（上・下）▶



▲SC-01出土の皆玉



▲SK-05 出土鉄斧 様前・正面・合わせ目（左より）

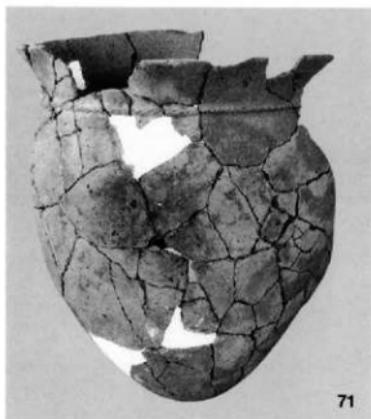


▲SC-01 出土遺物



▲SK-02 出土遺物

PL. 16



▲SC-03 出土遺物

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第483集
西新町遺跡 4

1996年3月31日

編集発行：福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課
〒810 ☎092-711-4667

印刷所：松井印刷株式会社
福岡市博多区板付6丁目9番2号
〒816 ☎092-593-1770

NISHIJIN MACHI RUINS 4

Excavation Report of
Jar burials and Pit dwellings
in Fukuoka City



March 1996

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

Japan